

富山県立山町総合公園内

# 野沢狐幅遺跡

発掘調査概報

1985年3月

立山町教育委員会



縄文時代中期の土器群

## 序

埋蔵文化財は、わが国の古代の歴史や文化を理解するために欠く事の出来ない、重要にして貴重な資料であります。

立山町では、先に吉峰段丘で重要な集落跡が発見され、二ツ塚においても数々の土器と共に集落跡が発掘・発見されております。上段段丘も、その地形や遺物断片等から、県下で有数の遺跡密集地であろうと予想されていたのであります。

たまたま、町制施行30周年記念事業として総合運動公園が上段段丘において計画され、その一部が野沢狐幅地内で実施されることになりました。試掘の結果は予想通り遺跡所在地되었습니다。大事業の建設ではありますが、貴重な文化財を見捨てることは出来ません。県教育委員会・町議会をはじめ関係各位の御理解と御支援のもと、昭和58年11月から59年7月まで発掘調査を実施しました。

その結果、遺跡は縄文時代中期を中心として営まれた集落跡であることが判明しました。また出土土器の中には、県下で数例目となる両棲類をモチーフとしたと考えられている文様を持つもの等もあり、今後の研究に示唆を与えるものであります。

この報告書がより多くの方々に活用され、文化財保護の一助となることを願んで止みません。

最後に、御協力いただいた富山県教育委員会・富山県埋蔵文化財センター・富山大学をはじめ関係者の皆様に衷心より感謝の意を表します。

昭和60年3月

立山町教育委員会

教育長 坂井 市郎

例 言

1. 本書は、富山県立山町野沢の総合公園野球場予定地内に存在する野沢狐幅遺跡の発掘調査の報告である。
  2. 調査は、昭和57年11月9日から12月8日（第1次調査）、昭和58年11月1日から12月8日（第2次調査）、昭和59年4月16日から7月27日（第3次調査）まで実施した。本書は、これらの調査結果を併せて収録した。
  3. 調査は、富山県埋蔵文化財センターとの協力を得て立山町教育委員会が実施した。
  4. 調査参加者は下記のとおりである。

調査担当者：富山県埋蔵文化財センター文化財保護主事酒井重洋（第1次調査担当）富山県埋蔵文化財センター文化財保護主事松島古信・立山町教育委員会野沢孤鶴跡調査員古川知明（現富山市教育委員会学芸員）（以上第1次調査担当）富山県埋蔵文化財センター文化財保護主事狩野時聰・立山町教育委員会社会教育課主事森秀典（以上第2次調査担当）調査員：富山県埋蔵文化財センター主任上野章一 調査補助員：立山町教育委員会嘱託堀田悠進・泉野重久、泉野三郎、大江外茂吉、城戸政雄、城戸正義、小池重次郎、小池光夫、高田重次、谷川千治、土井喜三郎、本多隆、松井一三、泉野ウタ子、泉野幸子、泉野ミキ、泉野ミツ子、石田トミエ、薄田ヤイ、大江ミツエ、大畑みき子・加藤幸子・加藤百合子・柏静枝・金尾トモ子・金川スミ子・木川アヤ子・城戸サツ子・城戸タミ子・城戸トシエ・城戸トミ子・城戸ハツエ・小池スズ子・小林ハツエ・沢崎クニ子・沢崎はる子・高木和子・高畠アヤ・高見ミツ子・高橋照子・高嶋シサ・寺林あや子・土井アヤ・上井クニ子・上肥ミツエ・中山悦子・西井一枝・西井ミノリ・西井八重子・構場クニキ・藤岸淳子・細川文子・細川ミツエ・山崎イミ子・和田トシエ・工学生：野木浩之・岡本淳一郎・島田修一・坂靖忠・武藤秀・北川美佐子・杉本弓子・水野かおる（以上富山大学）塚原一成（別府大学）

事務局は立山町教育委員会社会教育課に置き、庶務は主事渡辺久雄・森秀典が担当し、課長中田徳雄、課長代理開上寅が統括した。

出土遺物・資料整理参加者：岡本淳一郎、島田修一、吉田正人、大竹豊、神島勤子、宮田佐和子、牧野智子、齋本かをる、北川美佐子、杉崎容子、上田節子、山口チズ子、坪田和子、土田ユキ子、安部利子、久野静枝  
5. 遺構番号は、一連の通し番号を付した。

6. 遺物の整理・実測・トレース等には、高知県埋蔵文化財センター・主任上野章・文化財保護主事池野正男・同神保孝道・同藤麻隆・同橋本正春・同松島吉信の各氏の協力を得た。また、巻頭の写真撮影は、株式会社チューエツ写真館による。

7. 本書の編集・執筆は、富山県埋蔵文化財センター所員の助言・協力を得て狩野・森が分担して行い、各々の責は文末に記した。

目次

序文		第11図	土器実測図	16
例言		第12図	土器実測図	17
I 造跡の地形と周辺の遺跡	1	第13図	石器実測図	18
第1図 地形と周辺の遺跡	1	第14図	土器実測図	19
II 調査に至る経過	2	第15図	上器実測図	20
III 調査経過と層位	2	第16図	土器実測図	21
第2図 地形と区割図	3	第17図	土器拓本	22
IV 調査結果	4	第18図	土器拓本	23
1. 遺構	4	第19図	石器実測図	24
第3図 遺構実測図	6	第20図	石器実測図	25
第4図 遺構実測図	7	第21図	石器実測図	26
第5図 遺構実測図	8	V まとめ		27
第6図 遺構実測図	9	1 積穴住居跡と集落の変遷について		27
第7図 遺構実測図	10	2 遺物廃棄(遺構間土器接合)について		27
第8図 遺構実測図	11	3 繩文時代中期中葉の土器について		28
第9図 遺構実測図	12	第22図 遺構間土器接合関係図		29
第10図 遺構実測図	13	参考文献		31
2. 遺物	14	図版		

## I 遺跡の地形と周辺の遺跡

野沢狐幅遺跡は、富山県中新川郡立山町野沢字狐幅に所在する（第1・2図）。

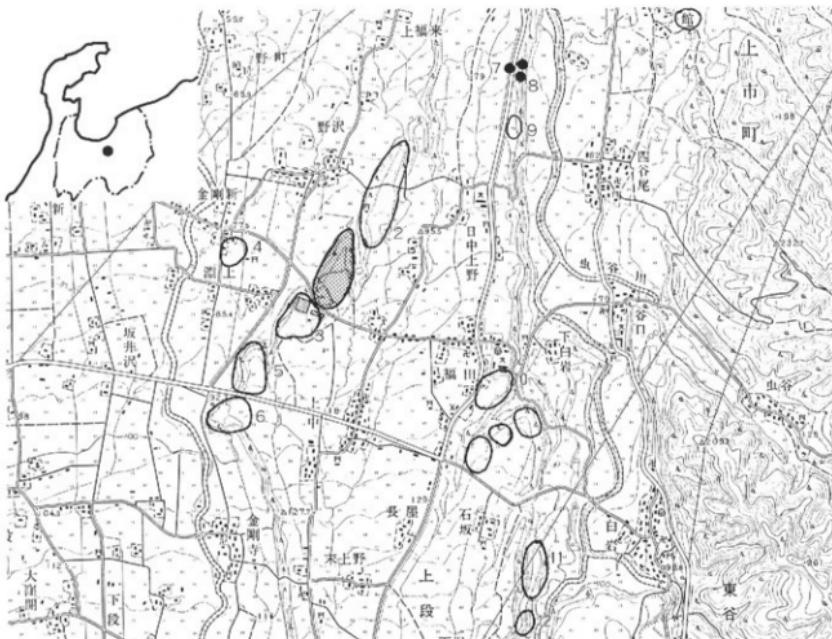
立山町は、富山県の東南部に位置し、県の中央部から東部にかけて細長く延びた町である。その面積は308km<sup>2</sup>と広大であり、地形も変化に富んでいる。

遺跡は、東を白岩川・西を常願寺川とその扇状地にはさまれた上段段丘上に、段丘西縁部が開析谷によって分断されて出来た舌状台地上に、東側の小支谷に沿って立地している。標高は95～100m、面積は約30,000m<sup>2</sup>である。

本遺跡の所在する上段段丘は、県下でも有数の遺跡密集地として知られており、先土器時代から中・近世までの遺跡が存在する（安田1977）。

周辺の縄文時代遺跡としては、段丘西縁には北から野沢大谷（縄文中～晚期）・野沢苦情池（縄文中期）・野沢竜ヶ鼻（縄文中期）・木上野竜ヶ浜（縄文前・中期）の各遺跡が、段丘東縁には北から日中墓ノ段（縄文中期）・日中上野東林（縄文）・白岩根骨（縄文前・晚期）・白岩戻ノ上（先土器・縄文早～中期）・白岩尾掛（縄文草創～中期）の各遺跡が、段丘北端には日中源兵衛腰（縄文早～中期・古墳）遺跡がある。また、他の時代の遺跡としては、藤塚古墳（消滅）・日中東経塚・日中玉橋経塚などがある。さらに、上段段丘より一段下りた面（下段段丘）には、本遺跡の西に金剛新遺跡（縄文前～晚期）がある。

（森）



第1図 地形と周辺の遺跡 (1/25,000) 1. 野沢狐幅遺跡 2. 野沢大谷遺跡 3. 野沢苦情池遺跡

4. 金剛新遺跡 5. 野沢竜ヶ鼻遺跡 6. 木上野竜ヶ浜遺跡 7. 日中東経塚 8. 日中玉橋経塚 9. 日中上野東林遺跡  
10. 白岩根骨遺跡 11. 白岩戻ノ上遺跡 12. 白岩尾掛遺跡

## II 調査に至る経過

立山町では、町制30周年を記念し、町民のスポーツ振興策の一環及びいよいよの広場として、野沢地内に総面積約18haの総合公園計画を企画し、マスタープランの作成が行われた。しかし、同地内には野沢孤幅・野沢大谷の2遺跡の存在が知られており、立山町建設課・同教育委員会・富山県教育委員会の三者により、遺跡の保護と工事計画との調整をはかるための事前協議が催された。

協議では、まず公園計画地内の分布調査を実施することになり、昭和57年4月に富山県埋蔵文化財センターの手によって延2日間で実施された。その結果、野沢孤幅・同大谷両地内のはば全域に遺物の散布が認められ、野沢孤幅(縄文中期)・野沢大谷(縄文中・晚期)両遺跡の存在が確認された。

以上の調査結果をもとに再度三者による協議が行われ、マスタープランで切土工事となる野沢孤幅遺跡の約8,000m<sup>2</sup>に対して遺跡の内容・範囲の確認を目的とした調査を実施し、遺跡の保護措置を考えることとして三者が合意した。

## III 調査の経過と層位

### 第1次調査（昭和57年度）

昭和57年11月9日から同年12月8日までの延7日間で実施した。造成工事予定地の約8,000m<sup>2</sup>を対象とし、幅1mのトレチを5m間隔で設ける、遺跡の内容と範囲の確認調査である。

その結果、台地の東側部分から先端にかけて、住居跡3棟・穴12ヵ所を検出した。遺物では、縄文時代の土器・石器、古墳時代の土師器、近世の陶磁器が出土した。

なお、野沢大谷遺跡においては遺構は検出されず、縄文時代（中・晚期）の土器・石器が若干出土したのみであった。

### 第2次調査（昭和58年度）

昭和58年11月1日から同年12月8日までの延21日間で実施した。第1次調査で遺構を検出した台地の東側を対象とした、遺構の分布状況等の確認のための調査であり、調査対象面積は3,600m<sup>2</sup>である。

その結果、縄文時代中期を中心とした時期の住居跡6棟・穴192個・溝12本と、近世のものと考えられる炭焼窯を検出した。また、遺跡の北側にさらに遺跡がのびており、新たに900m<sup>2</sup>を調査区に加える必要のあることが判明した。

### 第3次調査（昭和59年度）

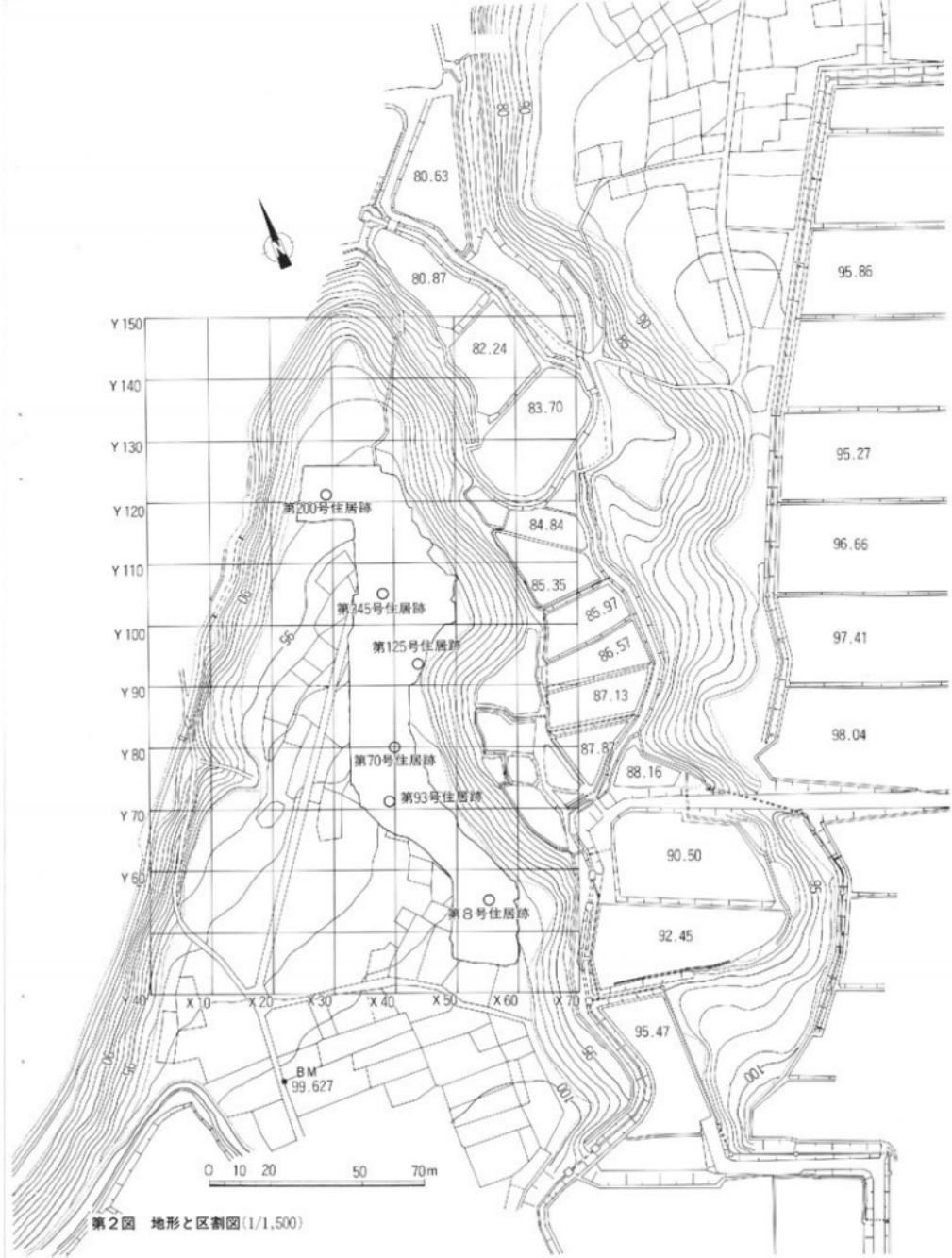
昭和59年4月16日から同年7月27日までの延44日間で実施した。第2次調査及び新たに拡張した調査区で検出された遺構の記録保存調査であり、調査対象面積は約4,500m<sup>2</sup>である。

#### 層位

層序は、第1層耕作土層（10~40cm）・第2層黒色土層（約20cm）・第3層地山漸移層（約10cm）・第4層黄褐色土層・第5層黄褐色土層となっている。このうち、第2・3層は遺物包含層であり、第125号住居跡より南側ではほとんど見られず、台地北半にのみ確認できた。また、第4・5層は地山層であり、遺構は全てこの地山（第4・5層）面上で確認されている。

なお、台地の北端においては第4層が見られず、礫まじりの黄褐色土層が第5層となっている。これは、第4層が流出したためと考えられる。

(森)



第2図 地形と区割図(1/1,500)

## IV 調査結果

### 1. 遺構

調査により検出した遺構は、大きく縄文時代と近世以降に属すると思われるものがある。遺構は、南北に伸びた舌状台地の東側縁辺部から中央部に集中している。一方西側縁辺部については、発掘区の北端を除くと確認されなかつた〔酒井1983〕。

**A 縄文時代 早期** 第11号穴（第8図1）は径1.7mの円形プランで、覆土より第11図1の尖底と、図版第16の19が出土した。覆土は地山土層（黄褐色）とよく似ており、地山上層より若干赤味の強い色調を呈す。

**前期** 第246号穴（第8図2）は不整長円形のプランで、覆土より縄文を施した含磁維土器が出土しており、早期末から前期初頭に位置づけられる。覆土はやや黒味のある褐色土が入る。第346号穴は円形のプランで、覆土の色調は茶褐色土である。遺物第11図2と図版第17の3・10が出土しており、前期後葉に位置づけできる。その他前期後葉に属する遺構には、第364・434号穴等がある。

**中期** 壇穴住居跡6棟及び穴があり、大半が中期に位置づけられる。約600個ほどの穴のうち、遺物を出土した穴は約90個あり、そのほとんどから中期の遺物が出土した。覆土の上層は、褐色土ないし黒褐色土が入る。

**第345号住居跡（第3図1）** 住居跡はX38Y126区付近で、台地中央部に位置する。規模は約3.6×2.8mの不整長円形プランである。住居の主軸はN-90°-Wの方位をとる。柱穴は遺存状況が悪く判然としないが、床面から約14-32cmと全体的に浅い掘り込みで、P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>～P<sub>7</sub>の5本主柱XY型（橋本1976）の配列と思われる。炉は住居跡中央西壁近くに、單式地床炉をもつ。焼土は薄く、あまり焼けていない。遺物はほとんど出土せず、床面直上より深鉢の底部が出土しており、胎土及び焼成等より中期に属すると思われる。

**第200号住居跡（第4図、図版第5）** 住居跡はX29Y122区付近で、台地先端部近くに位置する。規模は約7.4×5.8mの長円形プランで、北側に幅約2.6m、長さ約0.8mの張出しが付く。住居の主軸はN-6°-Eの方位をとる。柱穴は床面から約24-55cm掘り込んでおり、P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>・P<sub>10</sub>・P<sub>14</sub>・P<sub>15</sub>・P<sub>17</sub>・P<sub>19</sub>の9本主柱XY型の配列をとる。住居の主軸上にはP<sub>6</sub>・P<sub>11</sub>の漏斗状の穴が設けられている。床面は炉の南側から北東部にかけて黄褐色土が、他は礫まじりの黄褐色土が床面となり、礫のため凸凹している。炉は住居北側に小型の石組炉が設置されており（第10図1）主軸上に乗る。形状は方形状になると思われるが、炉石の南・西側がない。南側については地山層中の礫の一辺を利用したと考えられる。炉の底面には扁平な礫を1個敷いている。遺物は少なく、床面直上よりやまとまって1個体分が出土した（第11図5、図版第5の3）。それ以外には第11図4、図版第17の14-33がある。

**第125号住居跡（第3図2、図版第6）** 位置はX44Y95区付近で、台地中央部の東側縁辺部にある。規模は約4.5×3.5mの長円形プランである。住居跡の主軸はN-68°-Wの方位をとる。柱穴は床面より約27-48cm掘り込まれ、P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>8</sub>・P<sub>16</sub>の4本主柱X型の配列をとる。周壁西側にはP<sub>3</sub>を挟んでP<sub>1</sub>とP<sub>4</sub>があり、主柱穴以外の用途が考えられる。住居主軸上には、P<sub>3</sub>とP<sub>6</sub>の漏斗状の穴が乗る。炉は主軸上にあり、住居中央より若干西で、床面をやや掘り込んで石組炉が設置される（第10図2）。形状は方形状で約26×25cmと小型である。底面には扁平な礫を1個敷いている。遺物は多く（第11図6、第12図、第13図1-3、第17図5-12、図版第18）、その出土状況は、住居中央部より西側にかけて集中し、完形品を含んで、床面直上ないし、やや浮いて出土した（図版第6の3）。これらの土器の中には、第8・70・93号住居跡、第133号穴出土の土器と接合関係を持ち、遺物廃棄を考える上で意味がある。<sup>註①</sup>

**第70号住居跡（第6図、図版第7）** X40Y80区付近で台地縁部の東側縁辺部に位置し、Y75列からつづく緩斜面に直行して構築している。規模は約5.6×4.1mの長円形プランである。住居の主軸はN-15°-Eの方位をとる。住居北側は第84号穴を切って構築している。柱穴は床面より約47-66cmと深く掘り込まれており、P<sub>6</sub>・P<sub>8</sub>・P<sub>9</sub>～P<sub>11</sub>の5本主柱XY型の配列をとる。主軸上には、中央より南側に漏斗状のP<sub>2</sub>がある。南壁に接してあるP<sub>1</sub>は、住居跡廃絶後に

を掘り込んで構築したもので、覆土より第13図5が出土した。炉は住居中央より北側に石組炉が位置し、主軸上に乗る（第10図3）。形状は円形状で約30cmと小型である。か内には土器が敷かれ、この土器と住居南東の床面より約20cm近く浮いた状態で、壁側より住居中央に傾斜して出土（図版第7の3・4）及び、炉の北側で若干浮いて出土した土器と接合する。<sup>註②</sup> また一方この土器は、第125号住居跡出土の土器との接合関係がある。遺物はあまり多くなく（第13図4～6、第14図1～7、第17図13～16、図版19の1～16）、復原可能な土器の大半が第93号住居跡出土土器と接合関係がある。<sup>註③</sup>

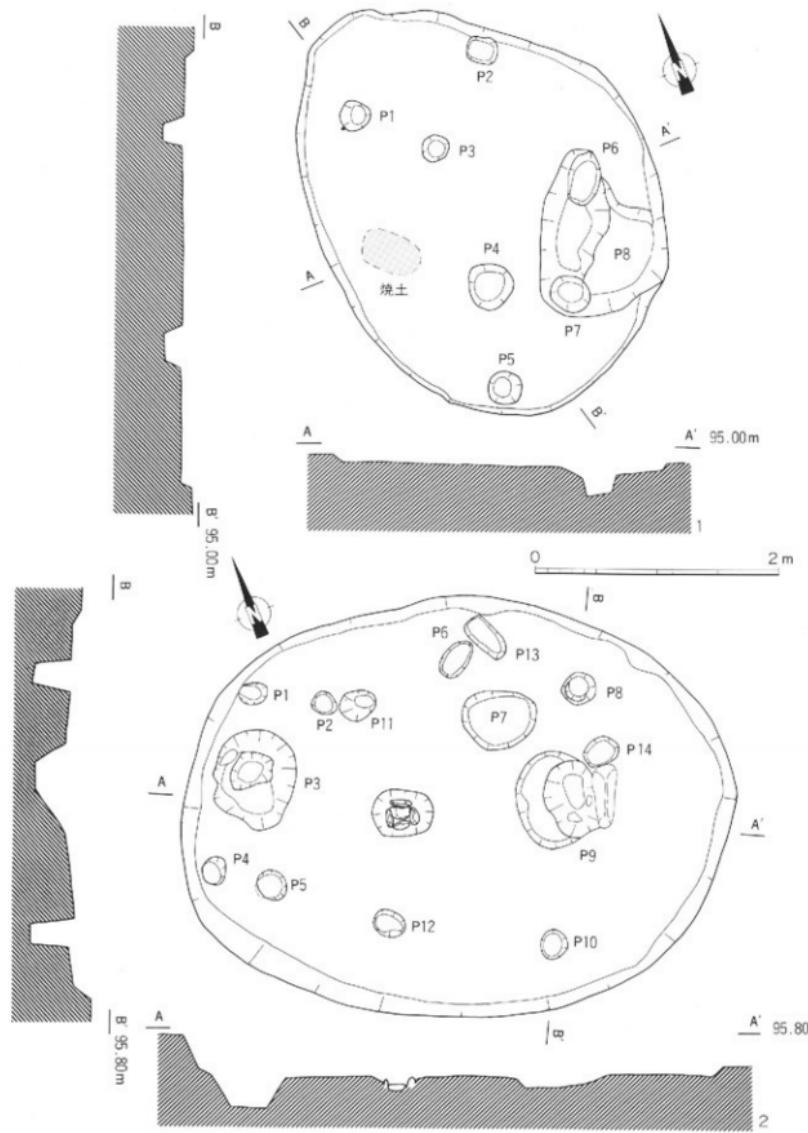
**第93号住居跡（第7図、図版第8）** X40Y72K付近で、第70号住居跡の約12m南側に位置する。規模は約5×4.3mで、やや丸味のある台形状のプランである。住居の主軸は廻転方向にあると思われN-81°-Wの方位をとる。柱穴はP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>4</sub>・P<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>の5本主柱XY型と思われる。ただP<sub>2</sub>は床面より約13cmと浅い掘り込みで、他は約50～58cmと深く、若干主柱穴としての疑問が残る。住居跡南西コーナーにはP<sub>3</sub>がある。穴の形状は袋状で主軸上には乗らず、他の住居跡の主軸上に乘る漏斗状の穴と異なる。炉は住居の中央南側では主軸上に石組炉がある。炉内には扁平な櫛を1個敷いている（第10図4）。形状は方形状で約24×28cmと小型である。住居の北壁には、幅約30～50cm、長さ約1.5m、深さ床面より約10cmの掘り込みがあり、両側にP<sub>6</sub>とP<sub>7</sub>がある。両者の床面よりの深さは約50～34cmと柱穴に近い深さがある。遺物は第125号住居跡について多い（第12図1、第13図4・6、第14図4～8、第15図1～8、図版第20）。遺物出土状況は床面直上ないし、やや浮いた状態で出土した（図版第8の3）。第13図6は第70号住居跡出土土器と接合関係があり、かの覆土上面より一括して出土している。これ以外に、他の遺構出土土器と接合関係にあるものは8個体あり、第70ないし125号住居跡の土器と接合する。

**第8号住居跡（第5図、図版第9）** 発掘区南端のX56Y55区付近に位置する。規模は長径約7.9m、短径は住居東側が1を取りのため消失しており、推定で約5.5m前後の長円形プランである。柱穴は残存部でP<sub>1</sub>・P<sub>6</sub>・P<sub>14</sub>・P<sub>28</sub>・P<sub>29</sub>が柱穴と思われ、消失部分を住居主軸で反転して復原すると、8本主柱X型と思われる。住居主軸はN-14°-Wの方位をとる。柱穴はP<sub>1</sub>が28cmで、他は50～70cmと深い。主柱穴以外に第2号炉を挟んでP<sub>22</sub>・P<sub>23</sub>があり、床面より約37・56cmと深く、主柱穴以外の用途が考えられる。住居中央より、北側に、主軸に乗ってP<sub>16</sub>がある。形状は漏斗状をしている。炉は住居北側に3基の石組炉がある（第10図5～7）。第2号炉は主軸に乗り、他の2基の炉は、主軸を中心にはば等距離をおいて対峙する。また第2号炉からの間隔は、陶炉とも約1mである。一方炉の長軸方向は、主軸上有る第2号炉の長軸と、第1・3号炉の長軸方向が、住居北壁近くで交差する。なお各炉のレベルは、床面の若干の高低差はあるものの、ほぼ同一レベル上にある。炉の形状は、3基ともはば円形をしており、径は第1号が約41cm、第2号炉約42cm、第3号炉約38cmある。第2・3号炉の底には1～2個の扁平な櫛が敷かれている。このように炉の設置及び形状を見ると、3基とも一定の方向性をもっており、同時存在したものと見たい。遺物は少なく（第11図6、第12図6・8、第15図3、図版第19の17～35）、4個体が第70・125号住居跡ないし、第80号穴の土器と接合する。<sup>註④</sup>

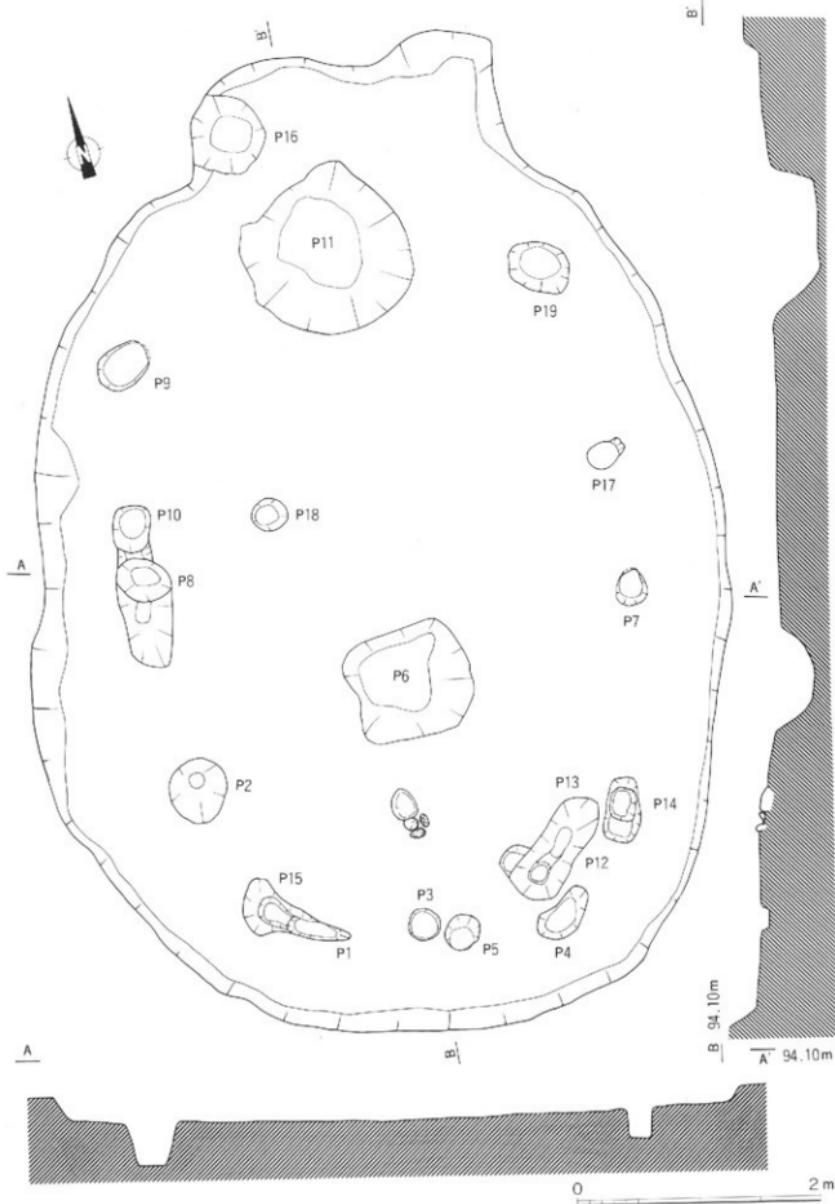
**穴** 発掘区全体に粗密を持って分布する。配列には特に意識的なものは認められないが、比較的住居跡周辺に集中する傾向が見られる。形状は第80（第7図2）・81号穴のように、大きな不整長円形以外は径40～1mの円ないし方形の穴が大半を占める。穴からの遺物の出土量は少なく、第133号穴及び第616号穴出土のものが、住居跡の土器と接合関係を持つ。比較的遺物量の多い穴は、第70・125号住居跡間に見られる。

**後期** 遺構は主にY106～115列の間に分散している。第560号穴は長方形状の穴で（第9図4）、覆土より第16図5かはば完形で出土した。第399号穴は円形状の穴で（第9図3、図版第11の5）、底面に1個体分の上器片（第16図6）を2～3枚敷く。その他後期の穴には第168・215・436号穴等がある。<sup>註⑤</sup>

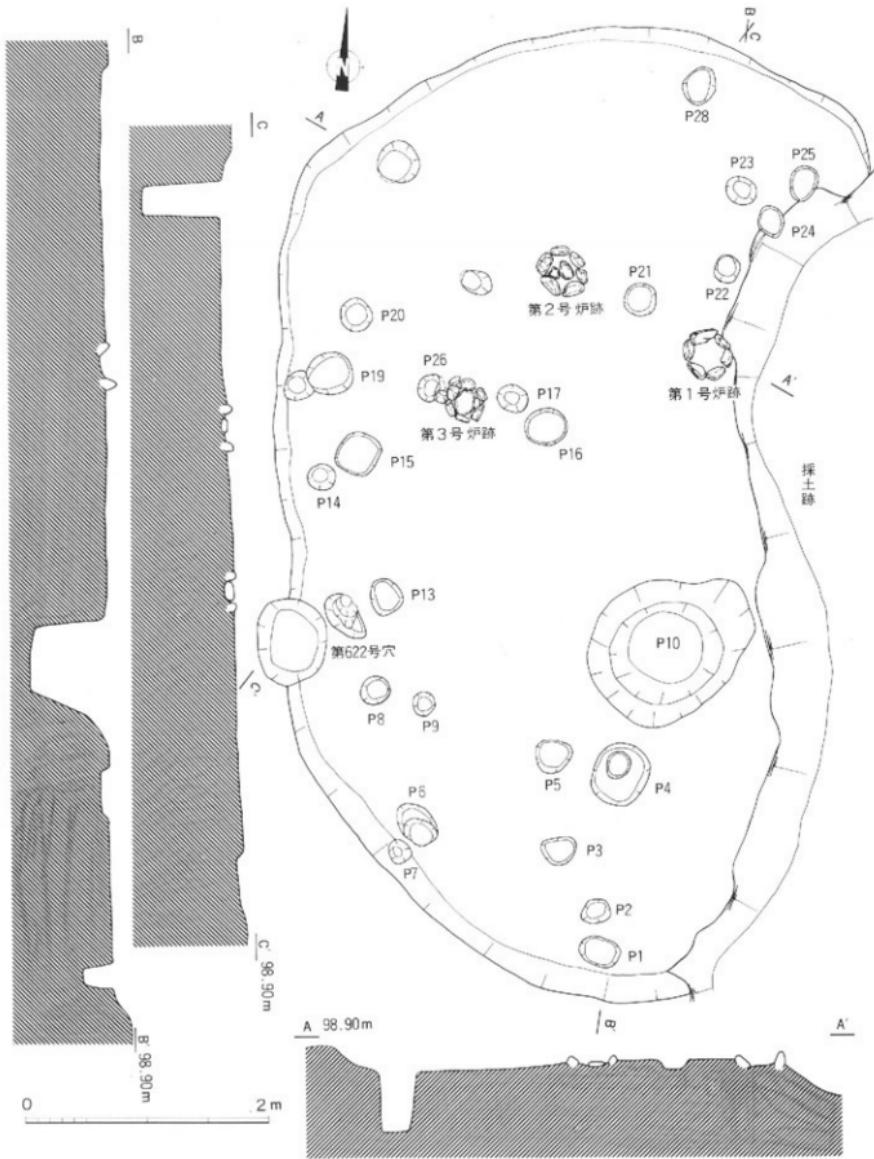
**その他**（第8図3～5、第9図1・2） 不定形の穴で、Y66～85列にかけて17個検出した（第17・43・84・85・257・260・278・279・281～285・287・296・559・622号穴）。これらの穴は、覆土が地山土層よりやや赤味がかった黄褐色をしている。また、この覆土内には焼土ブロックが含まれ、多量の炭化物と焼土ブロックを含む例もある（第257号



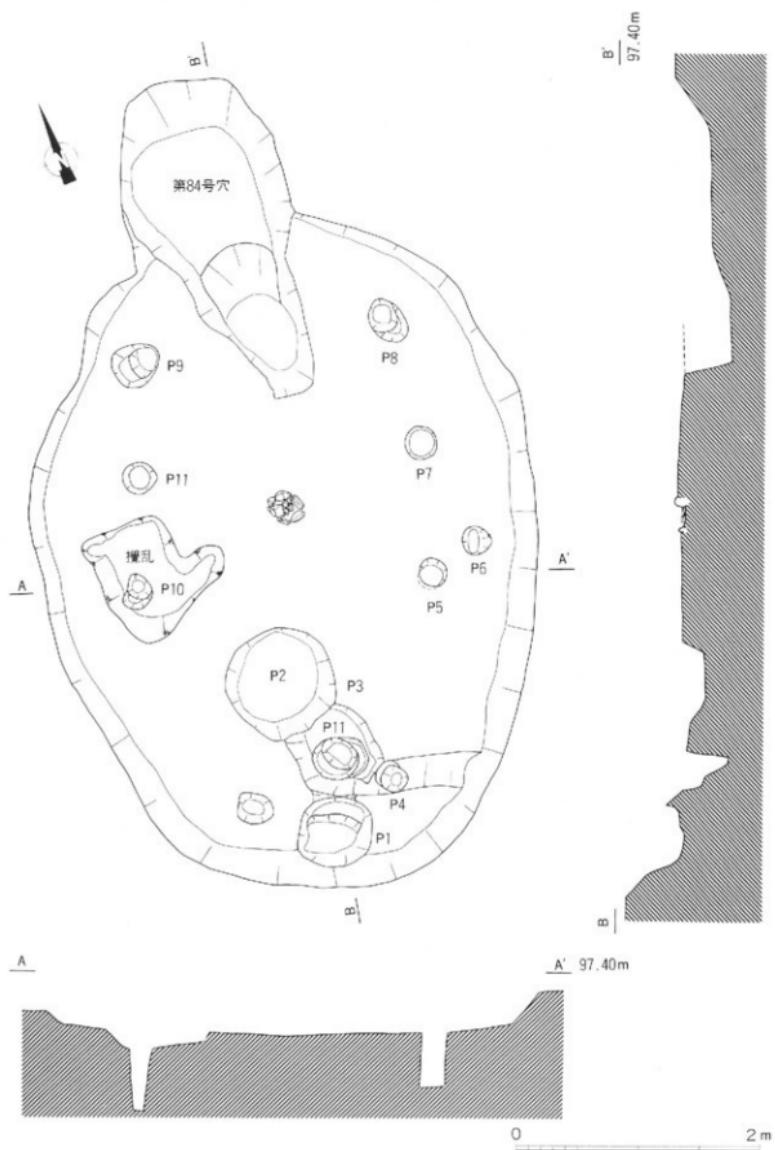
第3図 遺構実測図(1/40) 1. 第345号住居跡 2. 第125号住居跡



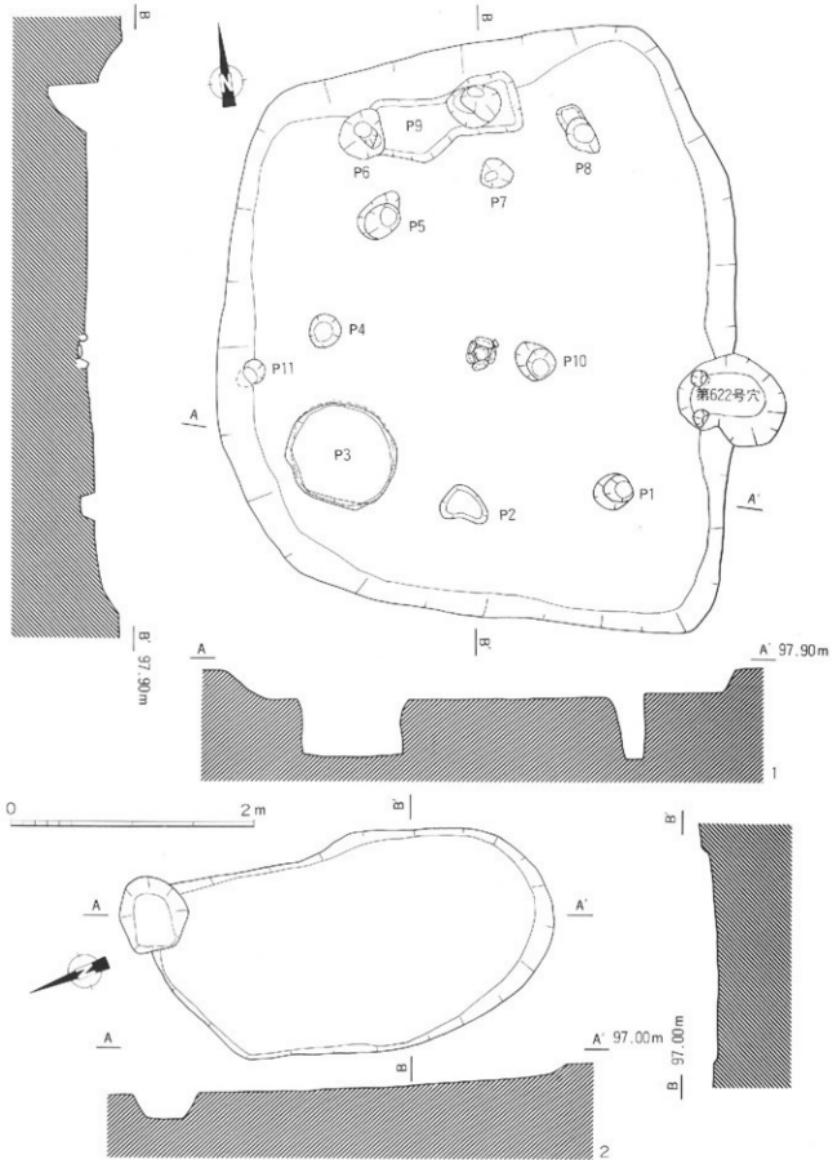
第4図 遺構実測図(1/40) 第200号住居跡



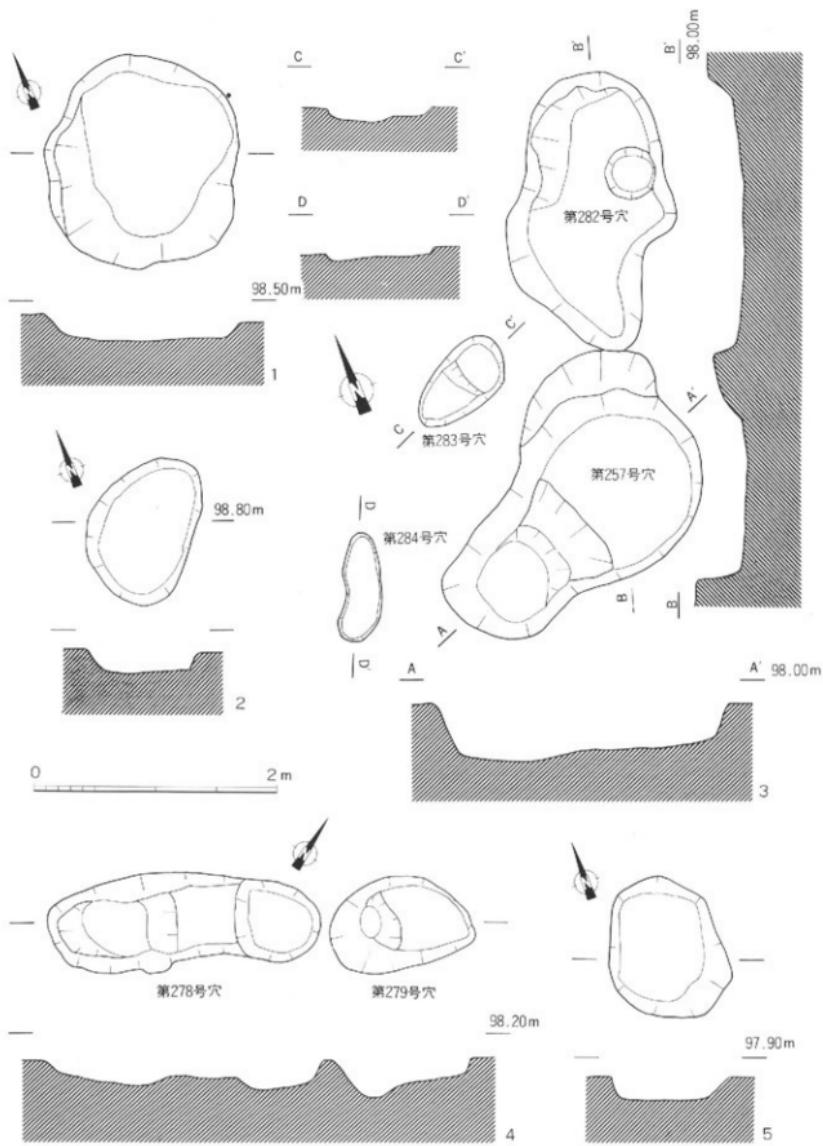
第5図 遺構実測図(1/40) 第8号住居跡



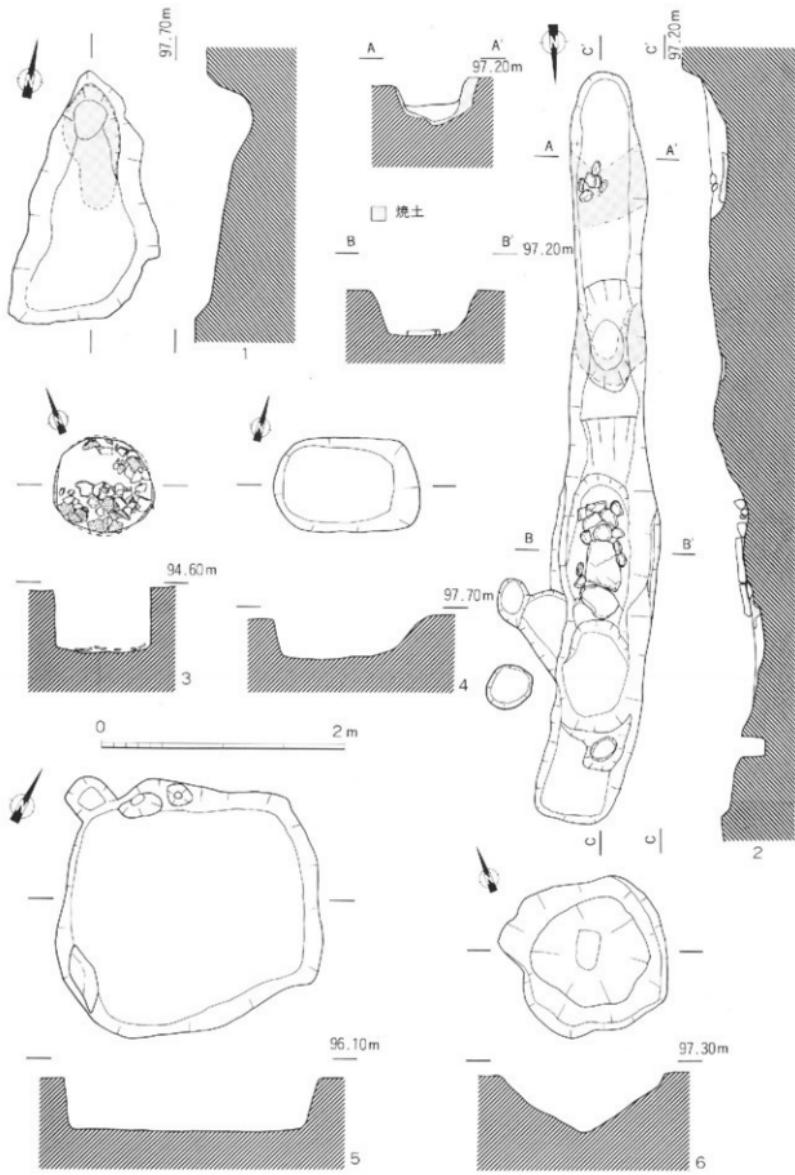
第6図 遺構実測図(1/40) 第70号住居跡



第7図 遺構実測図(1/40) 1. 第93号住居跡 2. 第80号穴



第8図 遺構実測図(1/40) 1. 第8号穴 2. 第246号穴 3. 第257・282~284号穴 4. 第278・279号穴  
5. 第559号穴



第9図 遺構実測図(1/40) 1. 第260号穴 2. 第43号穴 3. 第339号穴 4. 第560号穴  
5. 第117号穴 6. 第91号穴

穴)。第84・260号穴は、穴の最深部の底から壁にかけて、部分的に焼けており、県内での類例はないが、関東地方を中心で検出されている、早期後半の炉穴に類するものと思われる。これらの穴からは、縄文を施した土器片が出土したもので(図版第16・32~36)、時期比定できる資料はない。ただ、この穴群の覆土は早期の遺物を出土した第11号穴の覆土と色調が似ている。また、出土土器の胎土・焼成・成形等より一応早期に属すると思われる。第43号穴(第9図2)は、長さ6.2m、幅0.8mの溝状で、内部が部分的に底面から壁にかけて焼けており、焼土の上部には炭化物層が見られた。また先端及び中央部北側底面には礫が散かれ、火熱を受けている。覆土は上記の穴群とは異なり、黒褐色土ないし褐色土が入る。また出土遺物はなく、時期は不明である。

**B 近世以降(第9図5~6)** 5は炭焼窯と思われ、側面壁が赤褐色に焼け、覆土に多量の炭化物と焼土がレンズ状に含まれる。6は断面円錐形の穴で、覆土内に炭化物と大小の礫が入っていた。また、壁は若干焼けており炭焼窯と思われる。他に近世と思われる遺構として、発掘区中央部より北側で地境と思われる溝がある。(狩野)

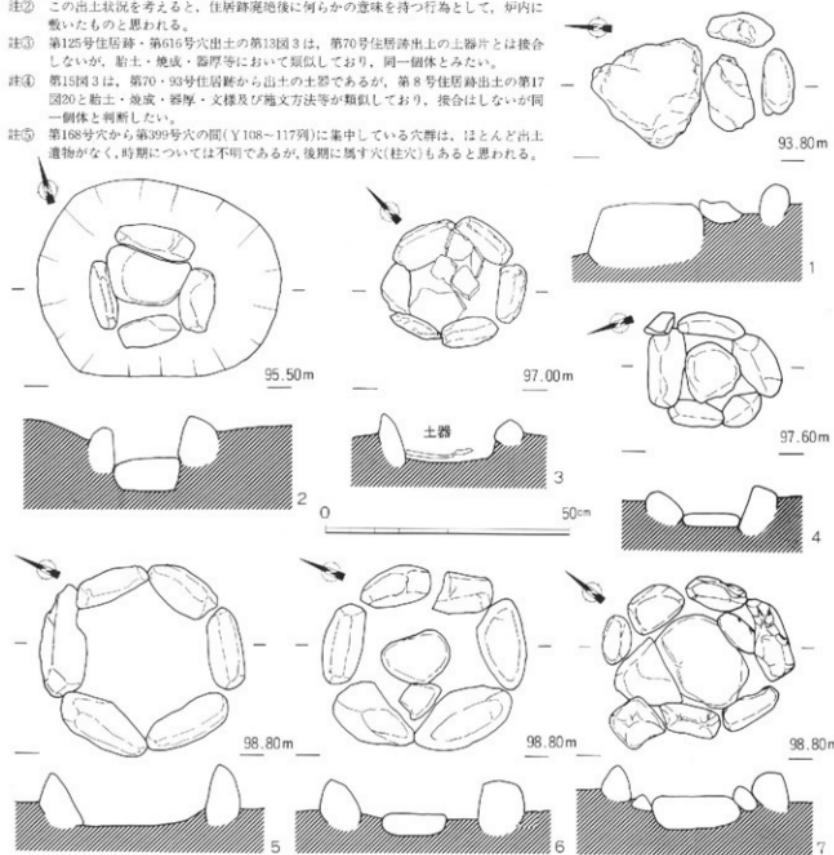
注① 遺構における土器接合及び廢棄については後論で述べたい。

注② この出土状況を考えると、住居跡発掘後に何らかの意味を持つ行為として、炉内に敷いたものと思われる。

注③ 第125号住居跡・第616号穴出土の第13図3は、第70号住居跡出土の土器片とは接合しないが、胎土・焼成・器厚等において類似しており、同一個体とみる。

注④ 第15図3は、第70・93号住居跡から出土の土器であるが、第8号住居跡出土の第17図20と胎土・焼成・器厚・文様及び施文方法等が類似しており、接合はしないが同一個体と判断したい。

注⑤ 第168号穴から第399号穴の間(108~117列)に集中している穴群は、ほとんど出土遺物がなく、時期については不明であるが、後期に属する穴(柱穴)もあると思われる。



第10図 石組炉実測図(1/10) 1. 第200号住居炉跡 2. 第125号住居炉跡 3. 第70号住居炉跡 4. 第93号住居炉跡  
5. 第8号住居第1号炉跡 6. 第8号住居第2号炉跡 7. 第8号住居第3号炉跡

## 2. 遺物

遺物には、縄文土器・石器・土製品と、少量の土師器・近世陶磁器がある。遺物の中で大半を占める縄文土器は、時期によって出土状況に差がみられるが、主として遺構より出土し、遺物包含層よりの出土は少なかった。

早期の土器のはほとんどは、Y60~90間の地山と同系色で若干赤味がかった覆土の穴から出土した。前期の土器は、Y85~125間の穴から出土している。中期の土器は、遺跡の全面より出土し量も多いが、復原出来た個体の大半は住居跡覆土内より出土した。後・晩期の土器は、出土量も少なく、第399・560号穴より各1個体分が出土している。

### A 土器

**早期**（第11図1、図版第16の1~7） 尖底土器（第11図1）と回転押型文土器（図版第16の1~7）とがある。いずれも胎土には織維は含まれない。尖底土器は第11号穴より出土したもので、無文である。回転押型文土器は、1~6は楕円文を、7は格子目状文を施文しており、いずれも横位の帯状施文構成で、1・4に無文帯が見られる。

**早期末~前期初頭**（図版第16の8~31） 佐波式から極楽寺式にかけての時期のもので、含鐵縄土器である。

8・9は貝殻腹縫による押印文を施すものであり、8は波状口縫を9は平縫を呈する。10~19は、貝殻腹縫等による条痕文を持つものである。20・21は、棒状工具による連続刺突文を施すものである。22~31は厚手の胴部破片であり縄文(RL・LR)を施している。特に25と30は羽状縄文を施している。また、32~36は縄文を施した胴部の破片で、早期と思われる穴より出土し、薄手で良好な焼成がなされている。

**前期**（第11図2、図版第12の1、図版第17の1~11） 前期でも後葉に属する時期のものである。

図版第17の1~10は、福浦上層式に比定できる。1~8は縄文地文の上から浮隆爪形文を施文しており、9・10は縄文地文の上から祐土紐を貼付している。

第11図2は、図版第17の3・10と同一遺構（第346号穴）出土のものだが、諸磯C式系の文様を施している。

図版第17の11は、網目状文とソーメン貼り文様を持ち、朝日下層式に比定できる。

**中期**（第11図3~6、第12~15図、第16図1~4、第17・18図、図版第17の12~33、図版第18~21）

**初頭~前葉**（図版第17の12・13） いずれも、新保式に属するものと思われる。12は、浅い半隆起線文様を持ち、キャリバー形深鉢の頭部と思われる。13は、厚手の胴部破片で、木目状撲糸文が施されている。

**中葉**（第11図3~6、第12~15図、第16図1~4、第17・18図、図版第12の2~7、図版第13・14、図版第15の1~3、図版第17の14~33、図版第18~21） 中葉でも前半のもので、出土した上器の大半がこの時期に属する。

**第200号住居跡**（第11図4・5、第17図1~4、図版第17の14~33） 第11図4は、爪形文を施した隆帯によって口縫部を区画する文様を持つ。また、キャリバー状の器形や文様より、文様帯は口縫部のみにあるものと思われる。

第11図5は、やはり隆帯を基調とした文様であるが、文様帯が胴部まで下がることや器形などに違いが見られる。

図版第17の14は、隆帯区画の形や、隆帯基部に連続爪形文を施すことから、長野県の新道式との関連が考えられる。

図版第17の15・23は、いずれも小破片であるが、15は三角形の抉り込みの間に沈線を残した蓮華文を、23は楕円の短い蓮華文を、それぞれ施文しており、あるいは前葉に属するかもしれない。

**第125号住居跡**（第12図、第13図1~3、第17図5~12、図版第12の4・6・7、図版第13の1・2、図版第18） 第17図5・6は、前葉の様相を残す口縫部破片で、隆帯による区画の中に蓮華文を施文している。

深鉢には、口縫部と胴部の文様帯を明確に区切るもの（第12図2・4、第17図8）と、口縫部から胴部へ文様帯が連続するもの（第12図1・3）の2種がある。第12図4は、半隆起線で口縫部を四角に区画しており、前葉の直後に置けよう。第12図2と第17図8は、いずれも口縫部に隆帯で三角形区画を施しており、2では隆帯上も区画内も無文であるが、8では隆帯上には刻みを施し区内にも施文している。第12図3は、半隆起線で三角形区画を意識した施文をしている。第12図1は、綾杉状刻みを施した隆帯を基調として施文している。

浅鉢には、口縁部に降帯で「し」の字状文様を施し、口唇に玉抱三叉文を配するもの（第13図1）、口縁部に玉抱三叉文を施し、全面を赤色顔料で彩色するもの（第13図3）等がある。

粗製土器には、口縁部に無文帶を持つもの（第12図5）、全面に縄文を施し、頸部及び口縁部に縄文を押圧するもの（第12図8）、口唇に隆帯をめぐらせ突起を付けるもの（第12図7）等がある。

第70号住居跡（第13図4・5、第14図1～3、第17図13～16、図版第12の5、図版第13の4・5、図版第14の1・2、図版第19の1～16）第17図13は、前葉の様相を残すもので、口縁部を隆帯で区画し蓮華文等を施文している。

深鉢（第13図4・5、第14図1）は、似かよった文様構成を持つが、文様や器形にそれぞれ若干の違いが見られる。また、第14図1は口縁部に無文帶を作り、他の2点とは異なる印象を受ける。

第14図2は、粗製土器で、口唇に突起を持ち、口縁部には縄文を押圧している。

第93号住居跡（第13図6、第14図4～8、第15図1～8、第18図1～14、図版第13の6、図版第14の3～8、図版第15の1・2、図版第20）第18図1・2は、前葉の様相を残すもので、口縁部を隆帯で区画し蓮華文等を施文している。

深鉢には、口縁部と胴部の文様帶を明確に区切るものと、口縁部から胴部へ文様が連続するものの2種があり、前者には第14図4・6が、後者には第14図5・7・8と第15図1～3がある。前者は、隆帯による口縁部の区画内に蓮華文を施文しており、前葉の様相を残しているといえる。後者では、第15図3は半隆起線のみで施文し、他のものは隆帯を基調とした施文法をとる。特に、第15図1は、12波頂の波状口縁器形で、他とは異なる印象を受ける。

第15図14は、粗製土器で、波状口縁の波頂部に円形の掘り込みを持ち、頸部には縄文を押圧している。

第8号住居跡（第11図5、第17図17～22、図版第12の3、図版第19の17～35）第11図5は、降帯を基調とした渦巻文により文様を構成しており、口唇には横S字状の突起がついている。また、文様は胴上部より上に集中してはいるが、上部の文様帶と下部の縄文とを明確に区切る横線は見られない。

住居跡以外出土の土器（第11図3、第16図1～4、第18図15～22、図版第12の2、図版第15の3、図版第21）

第11図3は、第11号穴出土の胴上部破片で、隆帯を基調とした文様構成をとり、第12図1に似る。

第16図1・2は、第133号穴出土の深鉢である。1・2ともに隆帯を基調とした文様構成をとるが、1が口縁部から胴部まで連続した文様であるのに対して、2では口縁部のみに文様帶を持つ。

第18図20は、第11図4と同様の隆帯区画を口縁部に施し、区画内には蓮華文を施文している。

第18図16・18は、第17図1と同様の文様を持ち、やはり新造式との関連が考えられる。

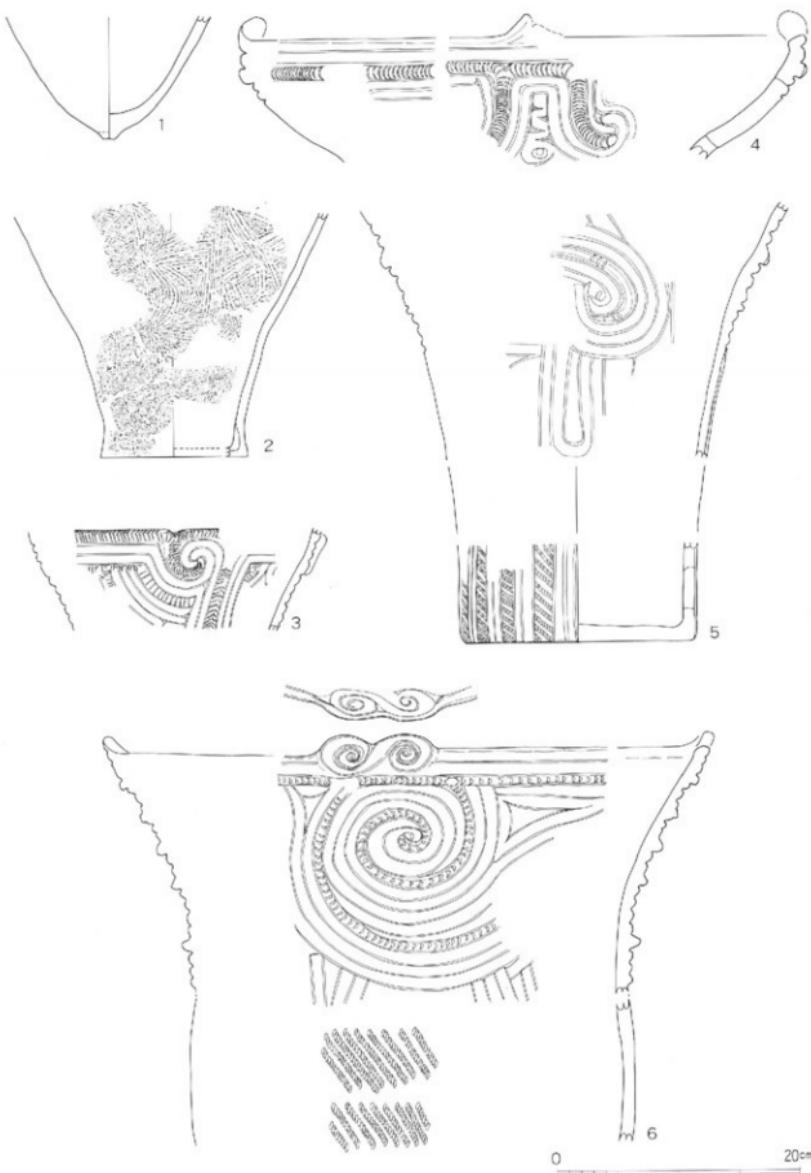
後期（第16図5、図版第15の4、図版第22の1～5）第16図5は、第560号穴出土のもので、舟形の体であり、口縁内面に3条の沈線をめぐらせ、沈線内に円形刺突を施す。図版第22の1は、深鉢の口縁部で、外面は沈線・曲沈線・縄文で施文し、内面にも2条の沈線を施している。図版第22の2・4・5は、胴部破片で、沈線で施文している。以上は、加曾利B1式に属するものと思われる。

図版第22の3は、無文であり、蓋か浅鉢の口縁部と思われる。

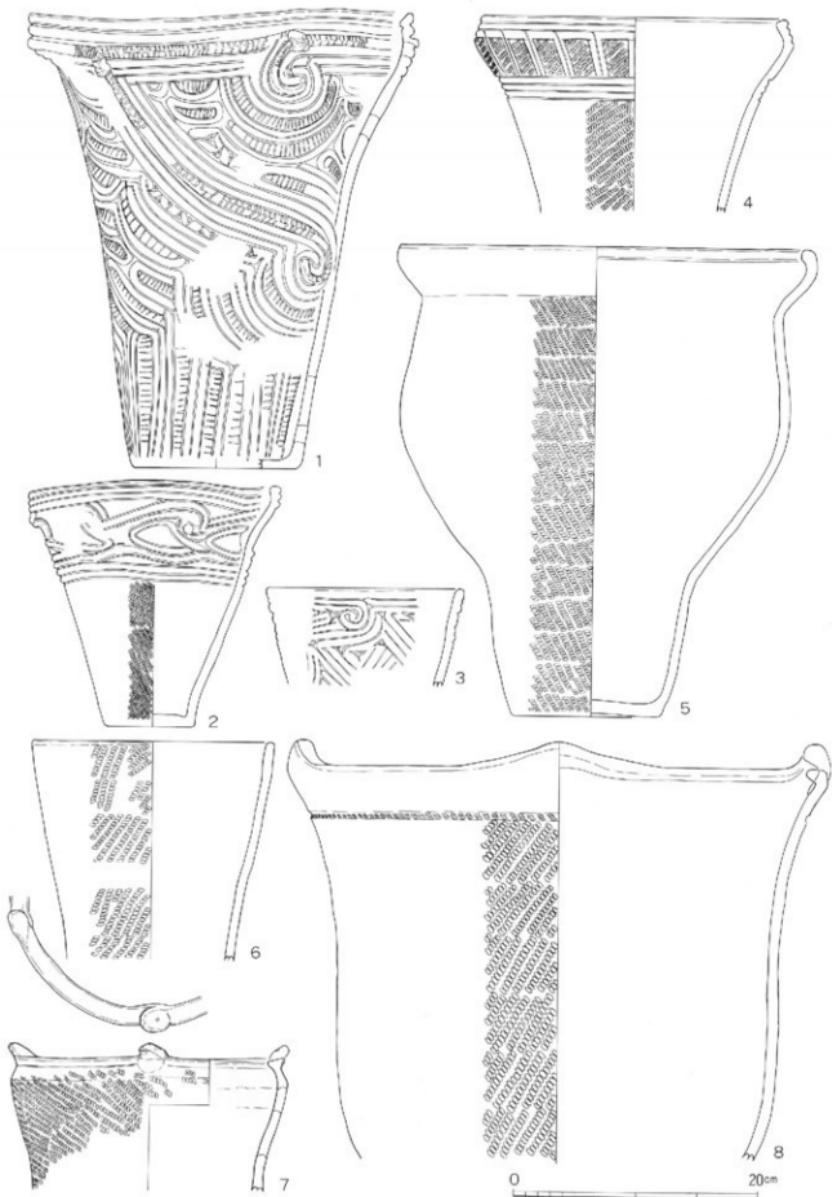
後期末～晩期初（第16図6、図版第22の6～10）第16図6、図版第22の6・10～12は、八日市新保式に属するものである。第16図6は、第399号穴出土のもので、口縁から胴上部にかけて2～3条単位の沈線を3段横走させ、所々を縦の短沈線で刻んでいる。また、口縁部に沈線で描いている文様は、連結三叉文〔高尾1964〕の祖形的な文様と思われる。図版第22の6・10～11は、いずれも磨削縄文により施文している。<sup>註①</sup>

図版第22の8・9は、同一遺構（第215号穴）出土のもので、8は勝木原遺跡（小島・出崎1967）の第14類Cに属するものと思われ、9は縦付き土器の系統に属する上器と思われる。

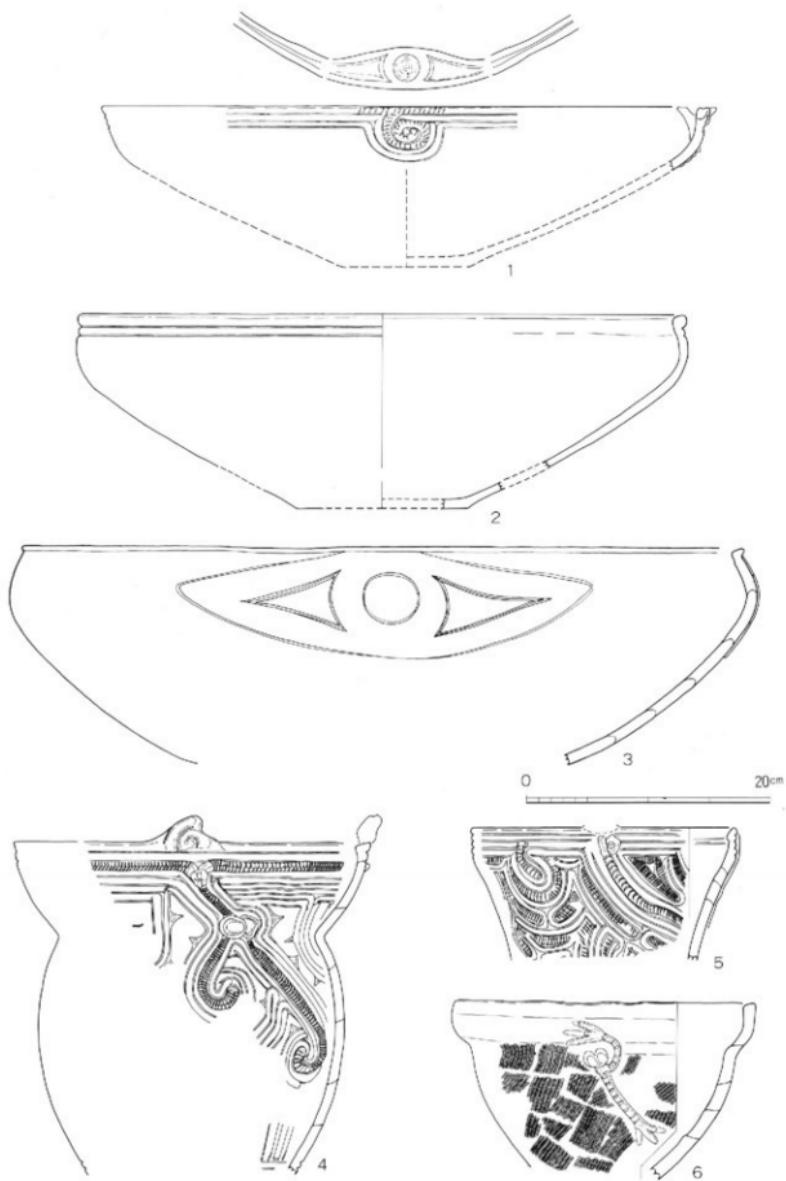
晩期（図版第22の13～21）13・14・17は、幅広の沈線で施文するもので、13は器面を赤色顔料で彩色している。15・16・18～21は、貝殻腹縁等で条纹を施すもので、18は棒状工具による刺突文も施している。



第11図 土器実測図(1/4) 1. 第11号穴 2. 第346号穴 3. 第160号穴 4・5. 第200号住居跡  
6. 第8・125号住居跡・第80号穴



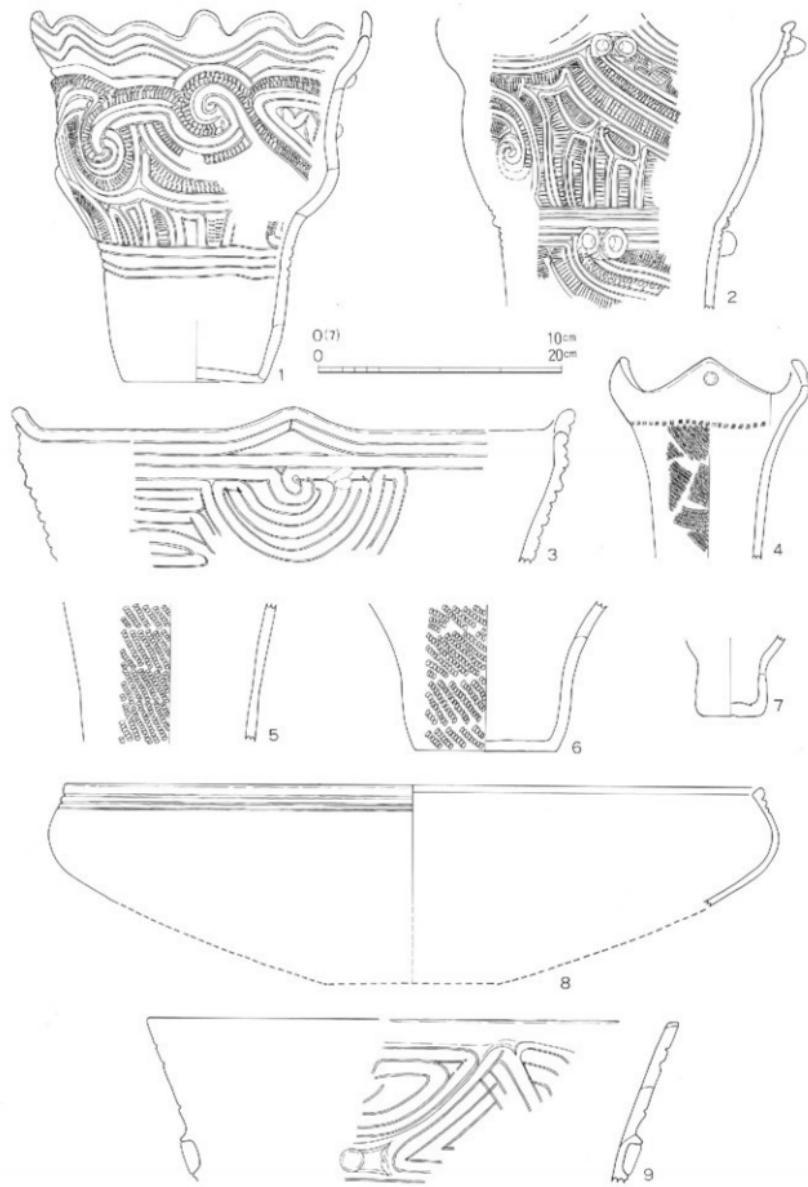
第12図 土器実測図(1/4) 1. 第125・93号住居跡 2・4・5・7. 第125号住居跡 3. 第125号住居跡・第133号穴  
・ 8. 第125・8号住居跡



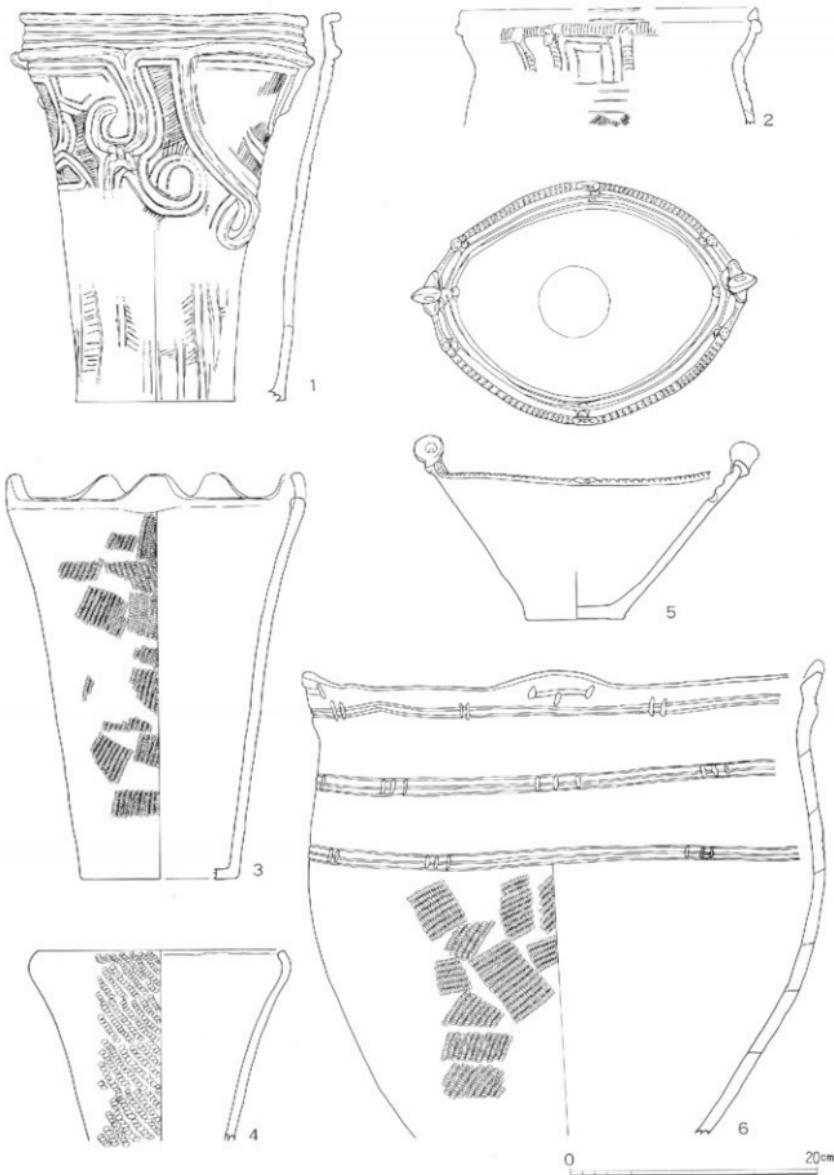
第13図 土器実測図(1/4) 1. 第125号住居跡 2. 第125・70号住居跡 3. 第125号住居跡・第616号穴  
4・6. 第70・93号住居跡 5. 第70号住居跡



第14図 土器実測図 1~7(1/4) 8(1/2) 1. 第70・125号住居跡 2・3. 第70号住居跡 4~7. 第93・70号住居跡  
8. 第93号住居跡



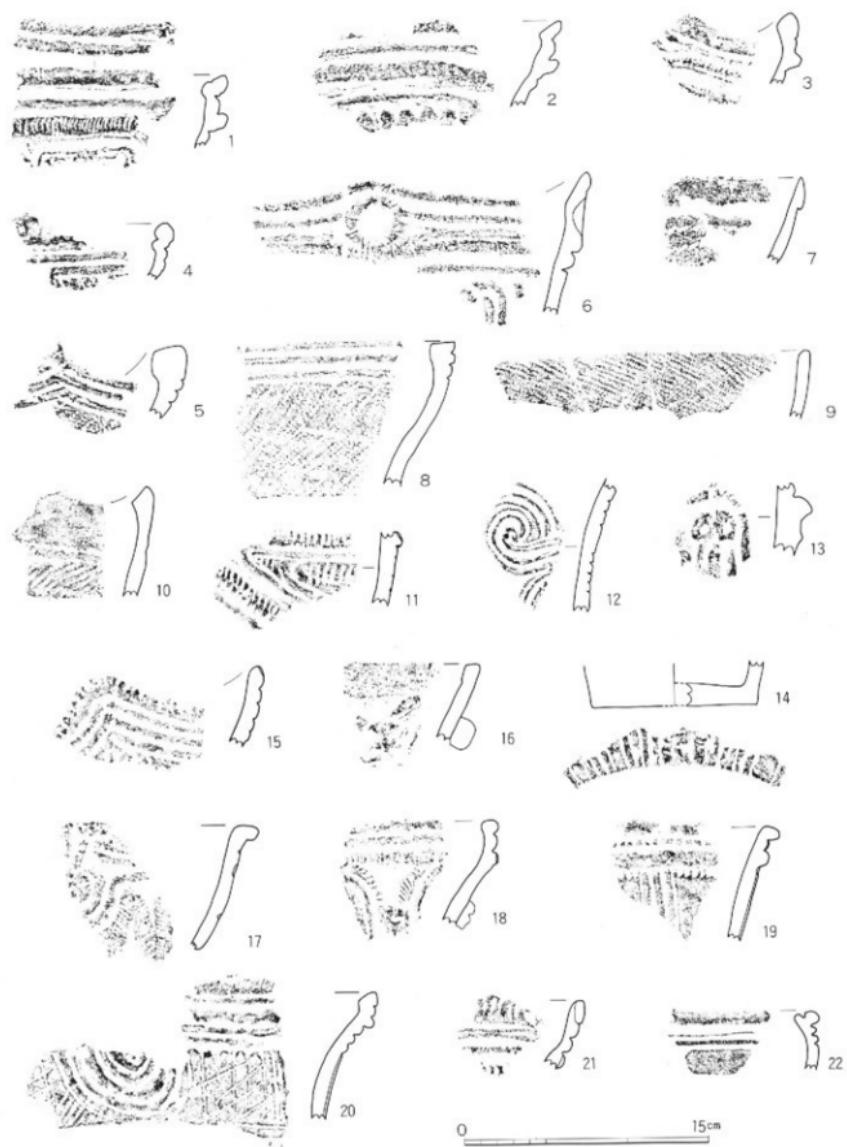
第15図 土器実測図 1~6・8・9(1/4) 7(1/2) 1・2・4~8. 第93号住居跡 3. 第93・70号住居跡  
9. 第556号穴



第16図 土器実測図(1/4) 1・2. 第133号穴 4. 第323号穴 5. 第560号穴 6. 第399号穴



第17図 土器拓本(1/3) 1~4・第200号住居跡 5~12・第125号住居跡 13~16・第70号住居跡 17~22・第8号住居跡



第18図 土器招本(1/3) 1~14・第93号住居跡 15~22・住居跡外

古墳時代（図版第22の22～24）22・23は胴部の、24は底部の破片で、月影式期に属するものと思われる。

中・近世陶磁器（図版第22の25～28）25は、伊万里の染付楕で、17～18世紀のものと思われる。<sup>註②</sup>

25～28は、越中瀬戸である。26・27は同一の楕の口縁破片で、28は陶製の鍤である。

#### B 土製品（図版第22の19～21）

球形土製品で、3点出土している。調整された表面に、焼成前に1ヵ所刺突を加えている。用途及び時期は不明である。

#### C 石器

石鉋（第19図1・2、図版第25の1・2）安山岩製で、1は基部が凹み、2は基部が平坦な三角形状である。

磨製石斧（第19図6～8、第20図1～9、図版第25の5～7・12～20）原材の石質は、全て蛇紋岩であり、平面形態には、短冊形と撥形がある。

第20図2は、局部磨製石斧で、刃部に部分的な研磨の跡が見られる。第20図8は、第8号住居跡から出土した。

打製石斧（第19図9、第20図10～22、図版第25の10、図版第26の1～10）原材の石質には、玉髓・砂岩・安山岩・<sup>註③</sup>粘板岩などがあり、平面形態には、短冊形・分銅形・撥形がある。

なお、第20図19は第125号住居跡より、第20図22は第93号住居跡より出土したものである。

擦石（第19図3・4、第21図17～20、図版第25の8・9、図版第27の8～11）大型のもの（第21図）は、楕円形の平面形態をとるものが多く、主に練辺部を使用している。小型のもの（第19図）は、表裏の平面に擦跡が見られる。

なお、第19図4は、第93号住居跡より出土したものである。

石鎌（第21図1～8、図版第27の8～11）扁平な自然石を利用し、長軸の両端を打ち欠いている。

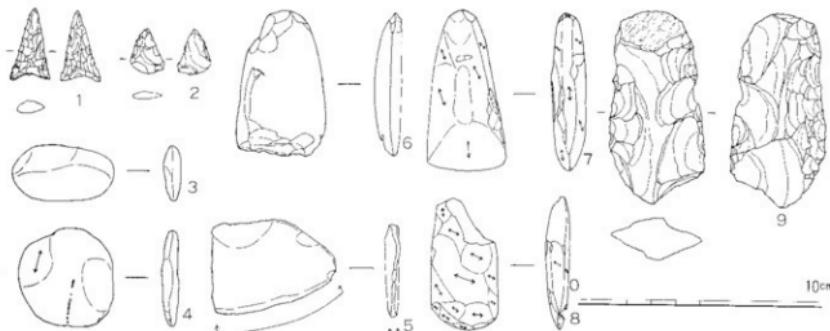
第21図3・5・6は第125号住居跡より、第21図4・7は第93号住居跡より出土したものである。

凹み石（第21図9～16、図版第27の1～7）第21図12は、第93号住居跡より出土したものである。

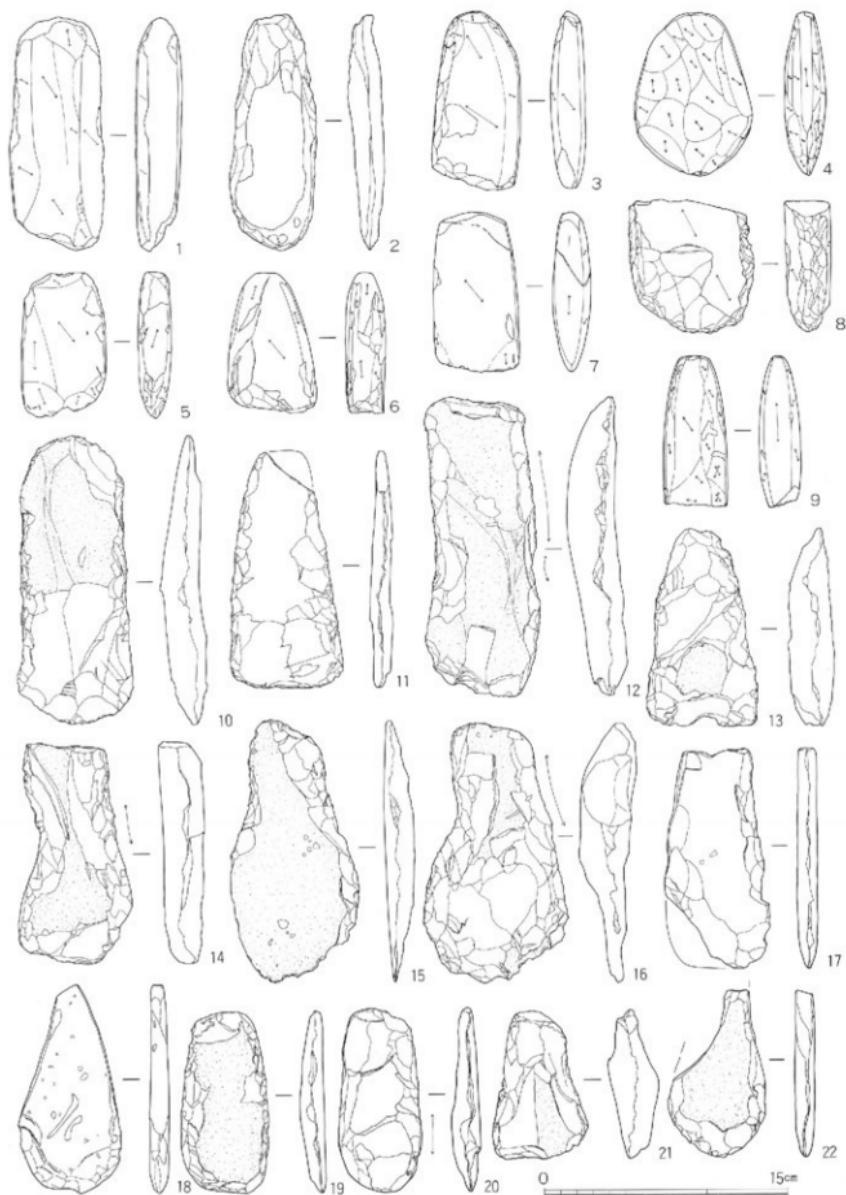
以上の他に、擦切り具（第19図5）、砥石（第21図21）、石皿（第21図22）、用途不明の石器（図版第25の21）が出土している。特に、図版第25の21は、楕円形の断面をした棒状石器の一部で、表面に敲打痕が見られる。（森）

註①・② 富山県埋蔵文化財センター・久々氏の教示を得た。

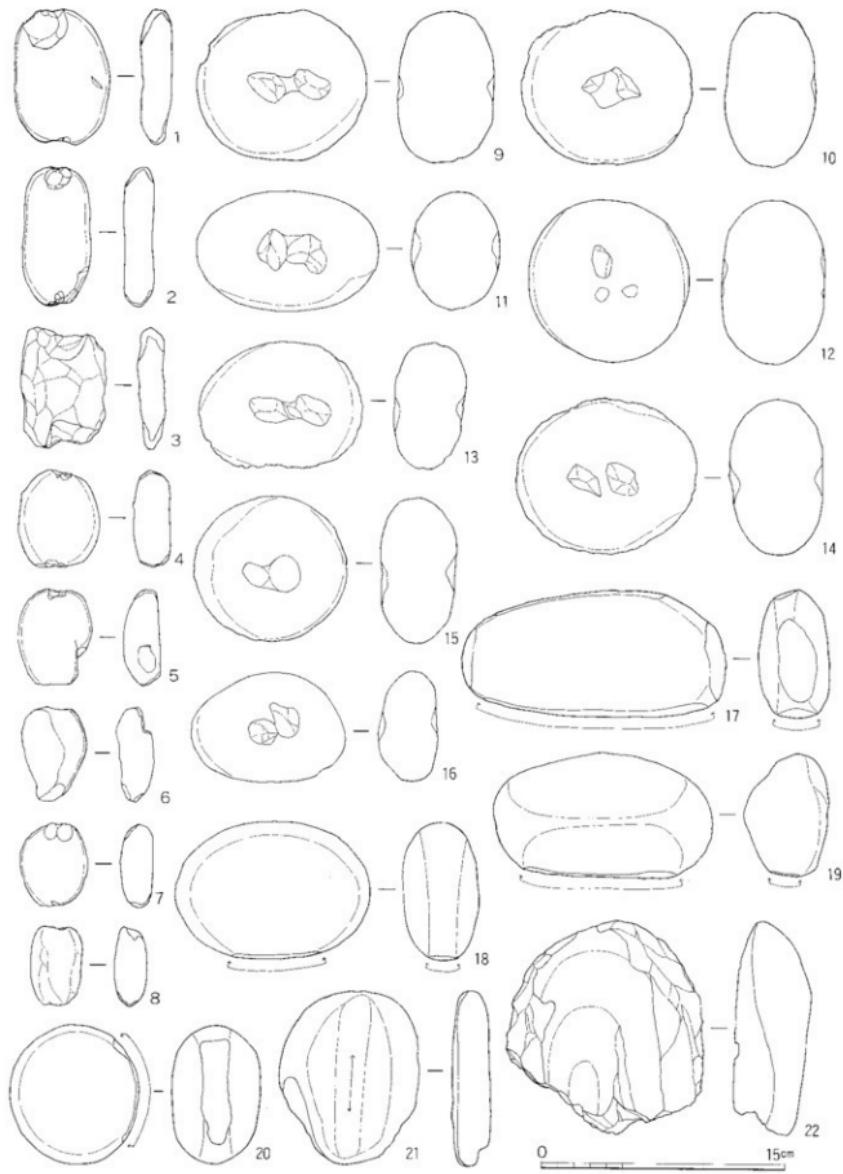
註③ 石器の石質については、富山県埋蔵文化財センター・山本・松島両氏の教示を得た。



第19図 石器実測図(1/2)



第20図 石器実測図(1/3)



第21図 石器実測図 1~20(1/3) 21・22(1/6)

## V まとめ

### 1. 壁穴住居と集落について

本遺跡で検出した遺構は、住居跡6棟・穴約600個近くあり、その大半が繩文時代に属し、特に中期中葉の所産と思われる。住居跡は、第345号住居跡が単設式地床炉で、他は第8号住居跡の複設式石組炉以外は単設式石組炉を持つ。プランは第93号住居跡が丸味のある台形、第345号住居跡が不整長円形で、他は長円形となる(第8・70・125・200号住居跡)。主柱穴の配置は9本主柱XY型(第200号住居跡)、8本主柱X型(第8号住居跡)、5本主柱XY型(第70・93・354号住居跡)、4本主柱X型(第125号住居跡)と、X型2棟、XY型4棟となる。住居跡の主軸方向は一定方向を示さず、南北方向が3棟(第8・70・200号住居跡)、東西方向が3棟(第70・93・345号住居跡)ある。これらの住居跡には第354号住居跡以外、第93号住居跡は住居南西コーナー近くに袋状の穴を持つが、他は1~2個の漏斗状の穴が主軸上に配されている。

住居跡の規模は、第8・200号住居跡が長軸約8m近くあり、短軸約5.5~5.8mある。他の住居跡は長軸3.6~5.6m、短軸2.8~4.4mと、第8・200号住居跡と比較すれば小規模である。この第8・200号住居跡は発掘区の両端に位置し、他の住居跡の約2~5倍の床面積を持つことから大型住居跡と言えよう。県内では現在までに4遺跡で大型住居跡が確認されている。中期前葉では朝日町不動堂遺跡(17×8m)(小島1974)、富山市追分茶屋(推定11×6.5m)(古川1984)、庄川町松原遺跡(11×7m)(池野1975)、中期中葉では小杉町水上谷遺跡(9×6.5m)(橋本1974)等がある。このうち水上谷遺跡は大型住居跡を2棟検出しており、他は漏斗面積にも関係するが、1棟のみ確認している。これらの大型住居跡のプランは長円形で、住居跡の主軸上に複数のがと、1~2個の漏斗状の穴がある。本遺跡の第8・200号住居跡は長円形のプランで、住居跡主軸上に1~2個の漏斗状の穴を持つが、炉は第200号住居跡が1基、第8号住居跡が住居跡北側に3基の炉が集中しており特異と言える。ただ第200号住居跡の炉は一辺の炉石が消失しており、炉の位置も南側に偏していることより、他に炉が存在した可能性がある。

当遺跡の2棟の住居跡は、他の大型住居跡と比較すれば、そう大型とは言えないが、中葉期の水上谷遺跡の大型住居跡と比較的近い規模を持っており、大型住居跡の系譜に連なるものと思われる。

6棟の住居跡は、出土土器より中期中葉に属すると思われる。なお第345号住居跡は覆土より土器の出土量も少なく中期中葉と判断できない。ただ炉は、他とは異なる地床炉を持つことより、中期前葉に属するかもしれない。

他の5棟の住居跡は覆土より、中期前葉的な様相と中期中葉的な様相を持つ土器群が混在して出土しており、比較的の様相の似た土器群が存在する。また一方ではその一部が、複数の遺構間で接合する事象が見られる。住居跡のプランは第93号住居跡以外長円形プランで、長円形プランが多い。炉は小型の石組かで、第70号住居跡の炉以外、炉内に1~2個の扁平な石を敷いており、第8号住居跡の炉は他よりも若干大きいが、それぞれていねいな作りで、それほど差異はない。この5棟の住居跡は中期中葉の天神山式期に構成された集落と思われるが、5棟の住居跡が同時に存在したかどうかは、当遺跡の南北に残っている未開拓地に、住居跡がまだ存在する可能性もある。そのため現段階では、遺物の出土状況及び遺構間の土器接合関係(土器廃棄状況)等により考えると、第8・70・93・125号住居跡が同時に廃絶された可能性がある。また第200号住居跡は、他の住居跡の形態及び炉の類似性より、同時ないし若干の前後関係を持つと思われる。

(狩野)

註① 各住居跡の炉内には、焼土及び炭化物は明瞭に残っていなかった。

当遺跡と同様な石組炉は、朝日町不動堂遺跡、小杉町水上谷遺跡、上市町水代遺跡(高橋1985)等で検出されており、中期前葉から中期中葉に見られる一形式である(橋本1971)。

### 2. 遺物廃棄(遺構間土器接合)について

当遺跡の遺物廃棄については、先にも述べたが、住居跡及び穴から出土した土器が接合する例が多く、15個体の土

器が、複数の遺構間の土器と接合した（第22図）。

この接合状況は、住居跡覆上出土のものが中心となり（第8・70・93・125号住居跡）、他に2個の穴（第113・616号穴）の覆上より出土したもののが接合した。なお住居跡及び穴周辺の遺物包含層より出土した土器と接合する例は見られなかった。また第200・345号出土の土器との接合関係は確認できなかった。

接合する遺構間の直線距離は、最大第8号住居跡と第125号住居跡間で約77mが3例あり（第22図G・IIの1・2）、最少第125号住居跡と第133号穴間で3mが1例ある（C）。

接合関係で最も多いのは、第70号住居跡と第93号住居跡間で7例ある（D・E）。また3遺構間での接合は、第8・70・93号住居跡間が1例（E）、第70・125号住居跡・第616号穴間に1例（A）確認できた。

接合する土器の量は、Aは第125号住居跡と第616号穴が同量で、第70号住居跡が1点。Bは第125号住居跡がほとんどで、第93号住居跡が1点。Cは第125号住居跡が多い。Dは第93号住居跡が多い（Dの1・2・5・6）、ほぼ同量（Dの3・4）がある。Fは1が第125号住居跡が多く、2は第70号住居跡が多い。Gは第125号住居跡と第80号穴が同量で、第8号住居跡が少ない。IIは第125号住居跡が多いという量的関係が見られた。

遺物の出土状況は各遺構とも、若干床面より浮いて出土しており、〈かたづけ〉行為（橋本1971）により、各遺構間へ運ばれ廃棄されたと思われる。ただこの中で、Fの2及びDの3の出土状況は注目でき、何らかの目的を持って遺構内に埋置した行為と思える。Dの3はいわゆる三本指を付した呪術的色彩の強い土器である。またFの2は器形及び文様の配列において、他の土器とやや異なり、Dの3に近い存在かもしれない。

これらの土器接合関係を見ると、住居跡という四地を意識的に遺物廃棄の場としており、ひいてはDの3・Fの2のような例より、過去に住居跡が存在したことを認識した行為と思われる事象もある。また、他の接合する土器についても2~3の遺構間に分けて、廃棄処理する行為については、何か意味のある行為と思われる。

この接合関係を持つ土器群は、比較的時間幅の少ない天神山式期の土器群と思われる。ただ一部に中期前葉的な様相を持つ物が含まれ（Fの1・2）、これらが共存するかどうかは一概には論じられない。また、他の住居跡覆上より出土した土器等も含めて、この遺物廃棄行為が短期間に行なわれたかどうかについては、各遺物の出土状況を見るとかぎり、また土器の接合関係等より考えれば、短期間に行なわれたものと思われる。

（猪野）

註① 現在遺物整理はまだ途中で、実例はもっと増えるかもしれない。県内では高岡市石塚遺跡（弥生時代）（橋本1971）、小杉町流通業務団地内No.7遺跡（縄文時代中期前葉）（上野1982）、立石二丁目遺跡（縄文時代中期中葉）（橋本他1978）等の遺跡で、遺構間の土器接合を確認している。

註② 7号の接合関係をもつ遺構は、第125号住居跡と第133号穴間で外側互に接合しておらず、また第70号住居跡と第80号穴以外は、ほぼ平面に近い場所に立地している。一方、各遺構の遺物出上段及び、遺物包含層上の土器が接合しない等より、遺構間よりの二次的流れ込みはないと考える。

註③ 旧居住者と新居住者が同一の兼構成員と想定されるが、集落の性格等の問題が残されており、今後の問題としたい。

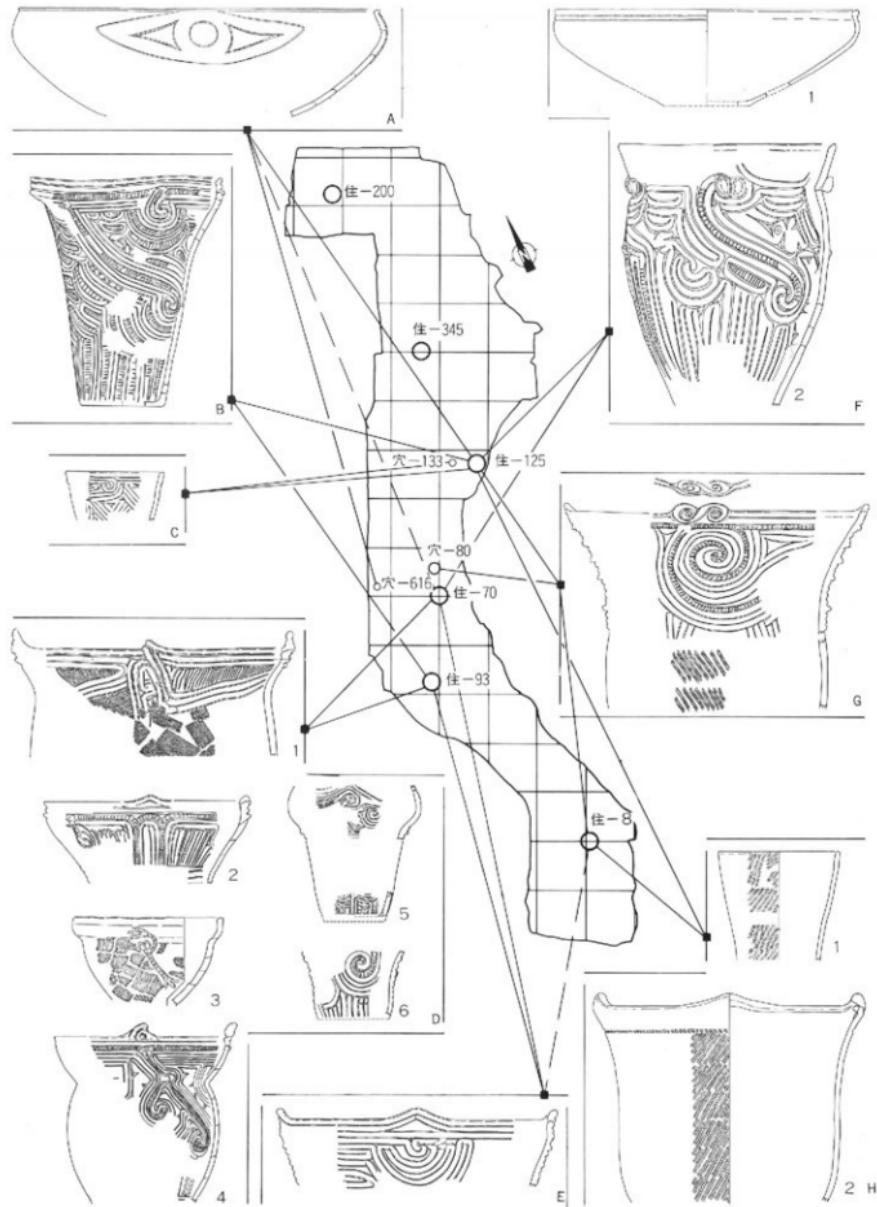
註④ 長尾森原村居沢尾根遺跡（小池1981）では162例の遺構間接合を確認し、一部に有意な関係を指摘している。しかし現在までに遺構間での土器接合が確認された類例は少なく、今後の資料増加に待ちたい。

註⑤ 中期前葉的な様相を持つ土器群については、〈かたづけ〉の不徹底及び、廃棄場所の移動等で、新居住者が旧居住者の廃棄物を再移動した可能性も考えられる。

### 3. 縄文時代中期中葉の土器について

本遺跡の遺構内出土土器は、ほとんどが縄文中期中葉に属し、いわゆる天神山式期（渕他1959）に比定できる。天神山式については、小島俊彰氏が「北陸の縄文時代中期の編年」（小島1974）の中で、「文様構成は、前葉のように口縁部と胴部の2文様帶に分けるものはない」と述べ、さらにa類（基盤帯上に爪形文を施すもの）とb類（基盤帯上に刻目文を施すもの）に2分し、それが前後関係に置けるであろうという見解を示している。

しかし、今回本遺跡より出土した土器の中には、小島氏による天神山式設定概念の範疇には入らないものも多数存在しており、しかも、その出土状況を見ると、遺構覆上内より混在して出土しており、層位等の差は見られない。すなわち、遺構内出土の土器は全て短期間に集中して廃棄されたものと考えられ、同一型式の枠内で一括して



第22図 遺構間土器接合関係図

注①  
とらえるべきと思われる所以である。

よって、ここでは本遺跡出土土器の分類を通して、天神山式の概念について再考を加えてみたい。

従来の同時期の土器分類に当っては、文様構成・文様単位・文様区画の変化等を中心として行なわれてきた。しかし、本遺跡の土器には器形の相違が明らかであり、その違いに従って文様構成等も変化している様子が見られる。よって、分類にあたっては器形を軸とし、それに文様構成等をからませて行なった。

器形は、円筒形胴部にキャリバー形口縁部のつくもの（A類）、全体に弱いキャリバー形器形をとるもの（B類）、円筒形胴部が上部で外反し、口縁部で直立又は「く」の字状に内反するもの（C類）、円筒形胴下部にキャリバー形の胴上部・口縁部のつくもの（D類）の4種に分けることができる。このうち、中心となる器形はC類であり復原可能個体の約半数を占め、同時期の主体となる器形といえよう。

文様構成では、口縁部と胴部の2文様帯に分けるもの（1類）と、口縁部から胴部へと文様帯が連続するもの（2類）の2種がある。前者は前葉から継続して見られる文様構成、後者は中葉になって出現した文様構成と言えよう。

文様は、文様構成と密接に関連しており、1類では蓮華文・格子目文・三角形去文・三叉文・玉抱三叉文が見られ、2類では、三角形去文・三叉文・無文帶内繩文・無文帶内横線文が見られ、少數ではあるが格子目文も見られる。これらの文様のうち、蓮華文・格子目文は前葉において盛行した文様であり、三叉文・玉抱三叉文なども前葉にすでに出現している。一方、三角形去文・無文帶内繩文・無文帶内横線文等は中葉になって出現した文様といえる。なお、降帶上の施文では、1類では爪形文を施すか無文であるのに対し、2類では綾杉状刻みを施すものが主体となっている。

以上の器形と文様構成を組み合わせて、本遺跡出土土器を分類すると次のようになる。

A 1類（第11図4、第14図4） 円筒形胴部にキャリバー形口縁部のつく器形をとり、口縁部と胴部の2文様帯に区分する文様構成を持つ。施文される文様には蓮華文・三角形去文・玉抱三叉文などが見られ、隆帶上には爪形文が施される。なお、胴部には繩文が施されるものと思われる。

A 2類（第14図5） A 1類と同じ器形をとるが、口縁部から胴部へと連続した文様構成を持つ。文様は、降帶による溝巻を基線とした文様であるが、部分的な破片のため他は不明である。隆帶上には爪形文が施される。

B 1類（第11図6、第14図1・4・6、第16図2） やや張り出した胴部が頭部で一扣くびれ口縁部で外反又は直立する、弱いキャリバー形器形をとるものである。文様構成については、第14図1のように口縁部を無文帶と頭部以下を連続した文様帯とするものもあるが、これは器形も他とは多少異なり特殊な例と思われ、口縁部と胴部の2文様帯に区分するものが主流と考えられる。文様には蓮華文・三角形去文などが見られ、第14図では無文帶内横線文も見られる。隆帶上には、ほとんどが爪形文を施しているが、第14図6では無文のままにしている。

C 1類（第12図2・4） 円筒形胴部が上部でやや外反し、口縁部で直立又は「く」の字状に内反する器形をとる。口縁部と胴部の2文様帯に区分する文様構成を持ち、胴部には繩文が施される。なお、第12図4は半隆起線のみで施文されており、口縁部を四角く区切る文様とともに前葉の様相を強く残している土器といえよう。

C 2類（第11図3・5、第12図1、第13図5、第14図7、第15図9、第16図1） C 1類と同様の器形をとるが、口縁部から胴部へと連続した文様構成を持つ。文様では蓮華文・玉抱三叉文以外の全ての文様が見られる。隆帶上は綾杉状刻目文と爪形文を施すものが半々で、第16図1のように無文のものもある。なお、本類は出土量も他の類に比べて圧倒的に多く、同時期の土器の主体をなすものといえるであろう。

D 2類（第13図4、第15図1・2） 円筒形の胴下部にキャリバー形の口縁部・胴上部がつく器形をとるものである文様構成では、口縁部から胴上部へと連続した文様帯とするものと、口縁部と胴上部の2文様帯に区分するものとがあるが、いずれも胴下部は区分しており、これは器形が関係しているものと思われる。文様には、格子目文・三角形

彫文土・無文帶内構線文などが見られ、第15回1では、無文帶内に連続爪形刺突を施している。降帯上は、全て綾形状の割目文を施している。

以上、各類に分類した中で、從来より天神山式深鉢として認識されてきたのは A2・C2・D2 類の各類であり、A1・B1・C1 の各類については良好な一括出土資料の少ないこともあって前葉巖照寺式〔神保他1977〕の範疇でとらえられてきたようである。確かに、後者は前葉から継続した様相が強く残っており、前者と比べて古い印象を受ける。  
しかし、先述したようにこれらは一括出土遺物であり、天神山式として同時期にとらえるべきであろう。

なお、A1～D2 各類の関係については、類似の一括資料が現在皆無に近い状態であることもあり、本遺跡出土資料のみによる断定は避け、他地域の土器型式（上山田式など）との対比や、前後の土器型式との関連の問題とともに今後の課題としたい。

註① ここでいう同一型式の持とは、小林達雄氏の使っている様式と同義であり（小林1977）、後述する各類が小林氏の型式に相当する。

註② 各類が空間的・時間的広がりを持つことは明らかであり、様式としての天神山式の時期という意味である。

（森）

## 引用・参考文献

- ア 池野正男・樋木 正・柳井 雄・神保孝造 1975 「富山県庄川町松原遺跡緊急発掘調査報告書」 富山県教育委員会  
池野正男・柳井 雄・神保孝造 1977 「富山県大沢町布尻遺跡緊急発掘調査概要」 大沢町教育委員会  
上野 章 1982 5 『6.7 遺跡北地区』 「富山県小杉町・大門町小杉流通事業圏内地遺跡群第3・4次緊急発掘調査概要」 富山県教育委員会  
カ 小池 孝 1981 第V章「居住址遺跡における縄文時代の生活 第1節 槽構間掩合の七器について」 「長野県中央道埋蔵文化財付属袋帯発掘調査報告書」 一原村その4 昭和51・52年度 長野県教育委員会  
高塵 寿 1985 「富山県上市町永代遺跡緊急発掘調査概要」 上市町教育委員会  
小島俊彰・出崎政子 1987 「轟本原遺跡」 「富山県立高岡工業高等学校地理歴史クラブ」  
小島俊彰 1972 「縄文中期」 「富山県史考古編」 所収  
小島俊彰 1974 a 「富山県朝日町不動堂遺跡第1次発掘調査概報」 富山県教育委員会  
小島俊彰 1974 b 「北陸の縄文時代中期の編年」 一般後の研究史と現状一」 大境第5分  
小島俊彰 1976 「富山市杉谷遺跡発掘調査報告書」 富山市教育委員会  
小島俊彰 1978 「富山県滑川市安田古窓跡発掘調査報告書」 滑川市教育委員会  
小島俊彰 1979 「石川県河北郡宇ノ沢町・上山田遺跡調査報告書」 宇ノ沢町教育委員会・石川考古学研究会  
小島俊彰 1980 「富山県朝日町不動堂遺跡第3次発掘調査概報」 朝日町教育委員会  
小林達雄 1977 「縄文上器」 日本国原古美術大系1  
サ 酒井重洋・橋本正幸 1977 「富山県糸魚川町蒲生山寺遺跡緊急発掘調査概要」 富山県教育委員会  
酒井重洋 1983 「富山県立山町合泊公園内野沢軒舎跡緊急発掘調査概要」 立山町教育委員会  
神保孝造・山上進一・松本幸治 1977 「富山県砺波市麻績町遺跡緊急発掘調査概要」 富山県教育委員会  
神保孝造 1980 「富山県福光町竹林」 遺跡緊急発掘調査概要 福光町教育委員会  
タ 高瀬勝喜 1954 「金沢市府内遺跡調査報告書」 石川考古学会研究全々誌第6号  
高瀬勝喜 1957 「石川県の貝塚」 「岸下の貝塚と古墳」 所収  
高瀬勝喜 1964 「金沢市郊外八日市新保ならびに御前塚遺跡の調査」 「押野村史」 所収  
富山県教育委員会 1973 「富山県朝日町下山新遺跡第1次発掘調査概報」  
ナ 中野修喜 1984 「土器捨て場考(II) -特に縄文時代中- 後期の関東及び中部高地を中心として」 日本考古学研究所集報VI  
沼田啓太郎・四柳嘉章 1970 「古府遺跡」 石川県教育委員会  
ハ 横木 正 1968 「同縣押切文土器の問題 一富山県の場合」 大境第4号  
横木 正 1970 「立山町吉峰遺跡緊急発掘調査報告書」 富山県教育委員会  
横木 正 1971 「立山町吉峰遺跡の解説について」 「小杉町中山南遺跡の調査報告書」 富山県教育委員会  
横木 正 1973 「富山県大沢町布尻遺跡緊急発掘調査概要」 富山県教育委員会  
横木 正・神保孝造 1974 「富山県小杉町木上谷遺跡緊急発掘調査概要」 富山県教育委員会  
横木 正 1976 「登穴住居の分類と系譜」 考古学研究第23卷第3号  
横木 正・柳井 雄・池野正男・酒井重洋 1978 「富山県立山町竹林遺跡緊急発掘調査概要」 富山県教育委員会  
横木 正・酒井重洋・久々忠義 1980 「富山県井口村井口遺跡発掘調査概要」 井口村教育委員会  
藤田富士夫・間 清 1975 「杉谷遺跡」 「富山市杉谷(A・G・II)遺跡発掘調査報告書」 富山市教育委員会  
古川知明 1984 「道分茶屋遺跡発掘調査概要」 富山市教育委員会  
マ 漢 畠・大谷清瑞・広田寿三郎 1959 「天神山遺跡調査報告書」 富山県教育委員会・魚津市教育委員会  
漢 畠 1971 「安本新遺跡調査概要」 宇奈月町教育委員会  
南 久和 1985 「北陸の縄文時代中期の編年」  
ヤ 安田良栄 1977 「郷土のあけぼの」 「立山町史上巻」 所収  
柳井 雄・神保孝造 1975 「富山県立山町吉峰遺跡第4次緊急発掘調査概要」 富山県教育委員会



図版第十一 野沢孤幅遺跡周辺航空写真



図版第2 1. 遠景(北より) 2. 遠景(東より) 3. 発掘区全景(南より)



図版第3 1. 中央部全景(南より) 2. 北側全景(南より)



図版第4 1. 北側穴群(東より) 2. 中央全景(北より)



1



2



3

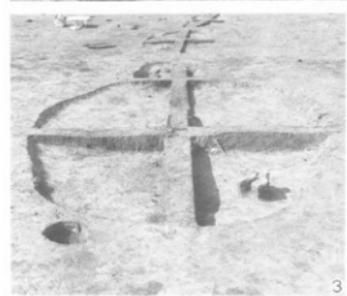


4

図版第5 第200号住居跡 1. 住居跡全景(東より) 2. 住居跡全景(南より) 3. 遺物出土状況  
4. 炉跡



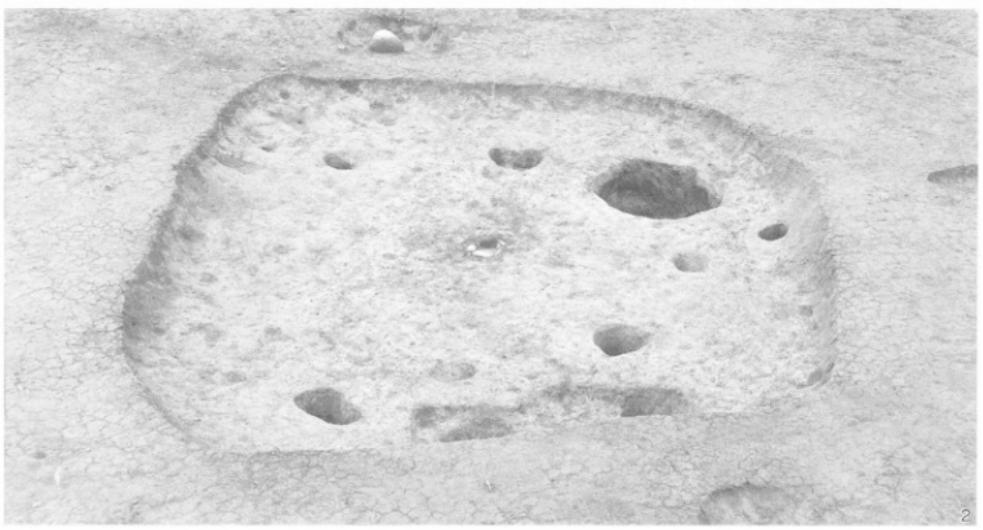
図版第6 第125号住居跡 1. 住居跡全景(北より) 2. 住居跡全景(西より) 3. 遺物出土状況  
4. 炉跡



図版第7 第70号住居跡 1. 住居跡全景(西より) 2. 住居跡全景(北より) 3. 遺物出土状況と層位(南より)  
4. 遺物出土状況 5. 伊跡



1



2

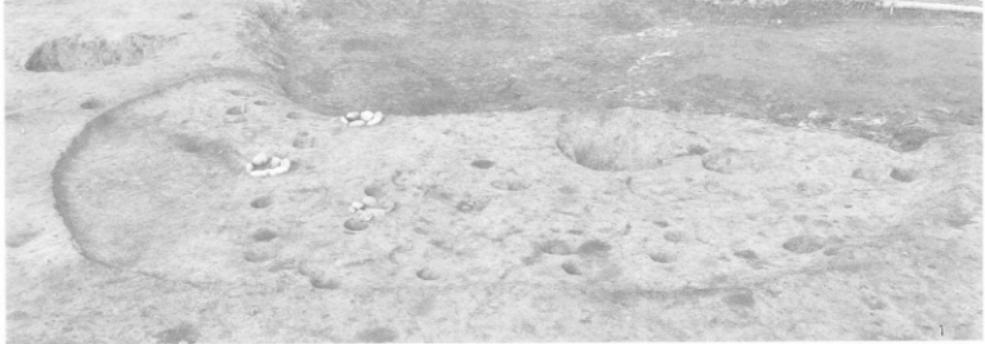


3



4

図版第8 第93号住居跡 1. 住居跡全景(西より) 2. 住居跡全景(北より) 3. 遺物出土状況と層位(東より) 4. 炉跡



1



2



3

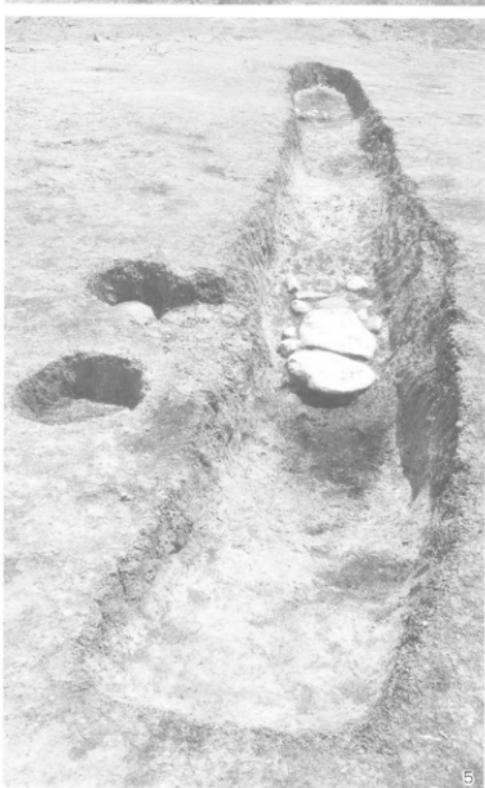
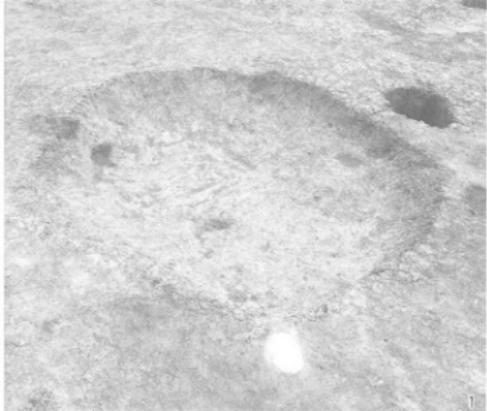


4



5

図版第9 第8号住居跡 1. 住居跡全景(西より) 2. 住居跡全景(北より) 3. 第1号炉跡  
4. 第2号炉跡 5. 第3号炉跡



图版第10 1. 第11号穴 2. 第278~279号穴 3. 第260号穴 4. 第257~282~284号穴 5. 第43号穴



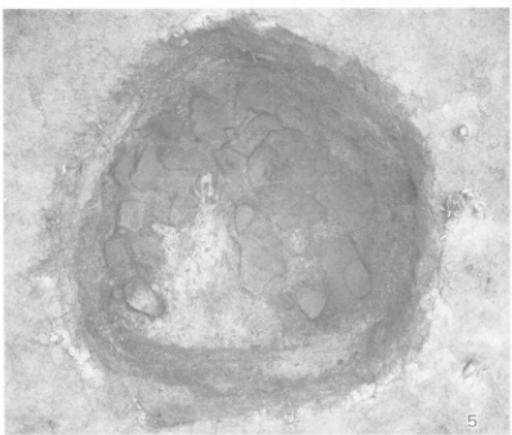
1



4



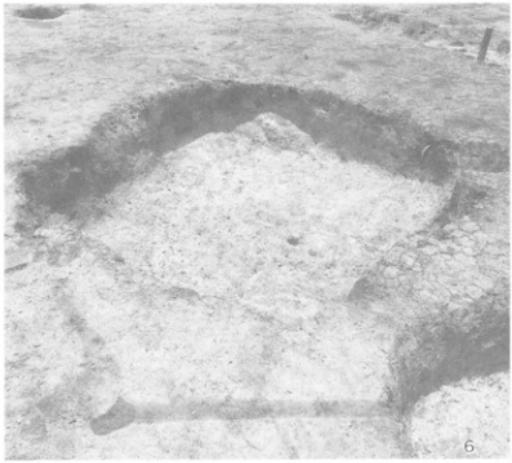
2



5



3



6

図版第11 1. 第286号穴 2. 第287号穴 3. 第289号穴 4.. 第80号穴遺物出土状況と層位(南より)  
5. 第39号穴遺物出土状況 6. 第117号穴



1



3



2



6



4



7

图版第12 土器 1·2·4~6(1/3) 3·7(1/4) 1. 第346号穴 2. 第160号穴 3. 第8·125号住居跡·第80号穴  
4~7. 第125号住居跡



1



2



3



4



5



6

图版第13 土器 1~4(1/4) 5·6(1/3) 1. 第125·93号住居跡 2. 第125·8号住居跡 3. 第125号住居跡·第616号穴  
4. 第70·125号住居跡 5. 第70号住居跡 6. 第70·93号住居跡



1



2



4



3



5



7



6

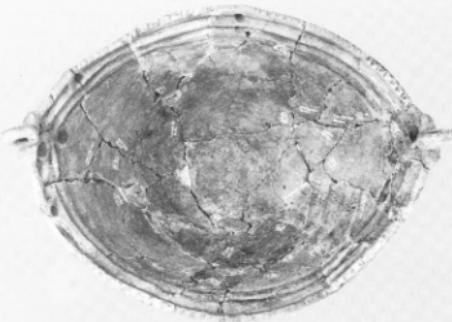


8

图版第14 土器 1~5(1/3) 6(1/4) 7·8(1/2) 1. 第70·93号住居跡 2. 第70号住居跡 3. 第93号住居跡  
4·5. 第93·70号住居跡 6~8. 第93号住居跡



1



4



2

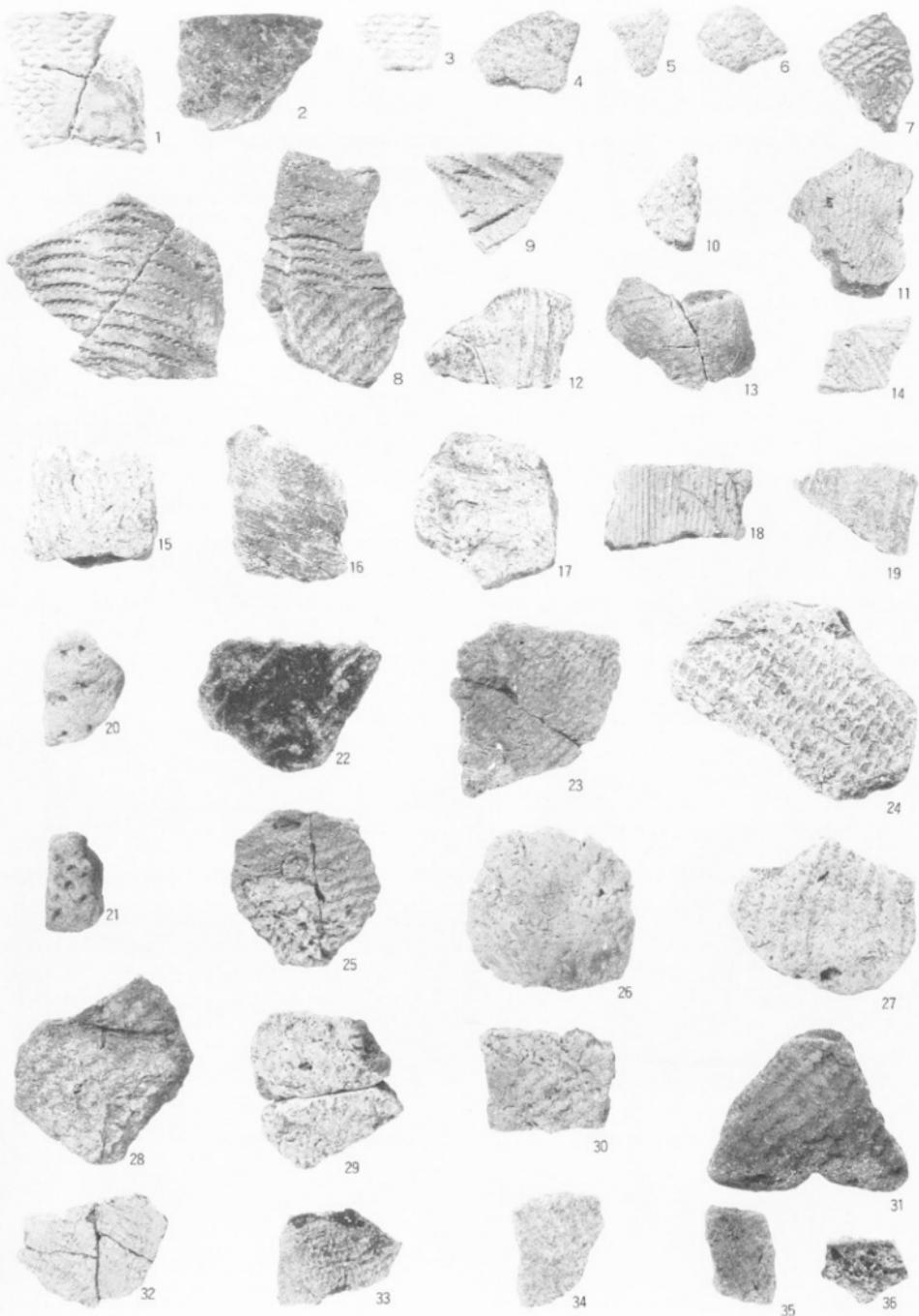


3



5

図版第15 土器 1~4(1/3) 5(1/4) 1・2. 第33号住居跡 3. 第133号穴 4. 第560号穴 5. 第399号穴



図版第16 土器(2/3)



図版第17 土器 1~13(2/3) 14~33(1/2) 14~33. 第200号住居跡



圖版第18 土器(1/2) 第125号住居跡